

かほく市が生んだ 2つの“巨塔”



西田幾多郎

文化勲章受章の哲学者

**鶴
彬**

国家に反逆 貫いた29年



さて あなたはどちら派？

片や日本の思想界をリードしてきた哲学者・西田幾多郎。片や特高に追われ獄中死した反逆の川柳人・鶴彬。ともにかほく市の生まれ。先の15年戦争時代、真逆の生き方をした2人です。同じ風土に生まれ育ちながら、その没後多くの後継者、崇拜者を生み出し哲学界に燐然と輝く評価に囲まれた西田と、闇に包まれほとんど忘れられたがら一叩人や澤地久枝さんの手で発掘され、日の目を見つつある鶴彬。また前者は国から文化勲章を受けたり、県、市の手で立派な記念館が作られているのに対し、後者は行政を頼らず有志によるボランティアで知名度を少しずつ上げてきました。今改めてこの2人を並べてみると、雲と泥、明と暗という図式がくつきりと浮かんできます。さらに2人の内部(考え方、思想)に立ち入って比較すると、あまりにも対照的な姿が見えてきます。

天皇制国家、軍国主義容認の西田、軍国体制に命をかけて抵抗、平和を希求した鶴彬。その経歴、思想を検証せず西田幾多郎をたたえるかほく市民に、鶴彬顕彰会の寺内徹乗さんが「ちょっと待つて」と声をかけました。**②ページ以下の力作をお読みください。感想、反論大いに歓迎。それによつて両者への理解が深まれば結構な事です。**



宇ノ気小学校壁面を飾る「無」の字



高松歴史公園の中央を飾る鶴彬句碑

鶴彬通信

は ば た き

第27号
2017年1月20日
鶴彬を顕彰する会

もくじ

②	～	⑬面	寺内徹乗著 「西田幾多郎の知られざる闇」
14	～	17面	12・8不戦のつどいで内灘鬭争を語る
19	～	29面	高松小、七塚小、生出小学童の感想文
29	～	32面	新連載・創作物語 「鶴彬つ子たち」

いま世に問う西田幾多郎の功罪 ②～⑬ページ

私の生まれ育ったかほく市には、同時代に活躍した対照的な二人の偉人がいる。一人は貧しいプロレタリアとともに生き、虐げられた人々の心を川柳に詠み、さらには戦争に反対したため、若くして獄死した鶴彬（一九〇九～一九三八）。もう一人は裕福なブルジョアの学生たちに哲学を教え、晩年は政治家や軍部と交わりながら、國家権力の中で栄光を掴み取り、鶴彬を弾圧した側に立っていた哲学者、西田幾多郎（一八七〇～一九四五）である。私は、かほく市で生まれ育ったという意味でも、哲学や仏教を学び川柳をやつているという意味でも、この二人は避けて通れない存在である。

鶴彬（旧高松町出身）は、戦後「非国民」という汚名は晴らされ全国的に高く評価されつあるが、地元では評価されるどころか知名度さえ低いままである。その一方で、西田（旧宇ノ気町出身）は日本の侵略戦争に加担し、戦後はその影響力も失われたにもかかわらず、地元では過大評価されている。この「ねじれ現象」は、西田が戦後七十年たった今なお、かほく市においては西田哲学の内容や歴史的立場について理解されることなく、無批判に顕彰され続けたことにある。また、

鶴彬を顕彰する会幹事　寺内　徹乗

西田幾多郎の知られざる闇

これはかほく市に限ったことではないが、戦後教育において満州事変に始まる十五年戦争について日本人が十分に学び反省してこなかつたことも要因だろう。

校舎壁面に大きく「無」の字

西田の母校、宇ノ気小学校の前には西田の胸像と、西田直筆の「無」の字を刻んだ石碑がある。校内のあちこちには西田の写真が貼られ、グラウンドから臨む校舎の壁には大きな「無」の字が掲げられている。その一方で、鶴彬の母校、高松小学校には鶴彬の影も形もない。また、宇野気駅前には西田の銅像があるが、高松駅前にはそういったものはない。

西田哲学はどういうものか。その難解な哲学を私は川柳にしてみた。

主觀客觀消えて個人が消えてゆく

（純粹經驗　絶対矛盾的自己同一　絶対無）
個が消えて皇國主義にのみこまれ

（東亜新秩序）
述語だけの場の世界にある無責任

（場の論理）

西洋では主觀や客觀を基礎にした存在（实在）の哲学であるのに対し、西田哲学は「絶対無」を基礎としている。西田の「絶対無」とは、分かりやすい言葉で言えば「永遠の死」である。西田は「自己の永遠の死を自覚すると云うのは、我々の自己が絶対無限なるもの、即ち絶対者に対するときである」と語る。だから、もし小学生に「あの校舎にある『無』はどういう意味ですか？」と問われれば、「死の世界だよ」と答えてあげればよい。

西洋では主觀や客觀を基礎にした存在（实在）の哲学であるのに対し、西田哲学は「絶対無」を基礎としている。西田の「絶対無」とは、自身の座禅体験や19世紀ドイツの哲学者・ヘーゲルの弁証法をもとに独自の哲学を開いた。

西田は、明治維新以降、日本が西洋化していく流れに「待つた」をかけた人物だ。

西田は「主客が対立分裂していない状態、純粹な意識の統一が現実として直感的に経験されている状態」、すなわち主觀も客觀もない「純粹経験」を、哲学の根本原理とした。

純粹経験は西田より先に19世紀アメリカの哲学者・ジェームズが唱えたものであるが、西田は自身の座禅体験や19世紀ドイツの哲学者ヘーゲルの弁証法をもとに独自の哲学を開いた。

これは笑い話で済まされない。「公」のために「私」が滅び、「死」へと向かっていく思想は、結果的には天皇を中心とする私滅奉公の国家主義へと発展し、戦争末期には特攻や一億総玉碎のアイデアに至った。もちろん西田は特攻について何も語っていないが、西田シンドバードの佐伯啓思京大教授は、「西田の哲学には、どこか深いところで、特攻などと通じ合う何かがあるような気がするのです」と語っている。（佐伯啓思著『西田幾多郎』）

私の思想と日本人』

主語のない無責任哲学

もう一つ西田哲学の重要な概念に「場所」がある。西洋では主観すなわち主語が重要となる。例えば、古代ギリシアのアリストテレスは「主語となり、述語とならないもの」を考えた。述語は主語を説明するものだというのは当たり前の話であるが、西洋哲学では述語で説明されない主語があると考える。それは物それ自体の本質であり、「我」ならば「主観」であり「存在(実体・実存)」であると考える。

西田哲学	西洋の哲学
主観=客観(純粋経験) ↓ 絶対無	主観—客観 ↑ 存在(実体・実存)
述語となり 主語とならないもの	主語となり 述語とならないもの
()は、人間である 高松出身 川柳を詠む 寿ずの息子 戦争に反対 独身…… 場	鶴彬は、人間である 高松出身 川柳を詠む 寿ずの息子 戦争に反対 独身……

それに対して主観を前提としない西田哲学では、「述語となつて主語とならないもの」を考える。アリストテレスとは逆に西田は主語に、どれだけ述語を書いて並べても、物それ自身には永遠に到達しないと考える。その西田のいう永遠に主語とならないものを

「場」と呼んだ。それは、すべてのものを包み込む「無限に深い超越的な主語」だと西田はいう。すなわち私たちが主語だと考えているものは、「私」ではなく、私→家族→友人や職場の人→地域→国家→世界→宇宙というふうに無限に広がっていくイメージを描けば分かりやすいだろう。そして「場」は「絶対無」になっていく。

だがこれでは、個人の責任の所在があいまいになりはしないか。すなわち重要なことが場の雰囲気の中で決まっていき、異論を唱えるものは周囲から袋叩きにあう。個人の責任は、連帯責任となり、結局、誰も責任をとらないままに絶対無の中に消えていく。

戦後、日本人が自らの手で戦争責任者を糾弾できず「一億総懺悔」の中でうやむやになつたことも、福島の原発で重大事故を起こしておきながら誰も責任をとらず、ずるずると再稼働していることも、日本人の無意識には西田のいう「場」の思想があるのかもしれない。これは日本の悪い文化である。

この複雑な西田哲学を分かりやすくするために、私は上のような図にまとめてみた。

西田の教え子だつた近衛文麿

西田自身もそうであるが、西田ら「京都学派」の哲学者の多くは、戦争協力者となつていった。そして戦争の中で分裂を遂げ、敗戦により没落した。戦後、京都学派の哲学者たちは厳しい批判を浴びせられたと同時に、日本は西田の呪縛から解放され、自由と民主主義に基づく国家になつていった。

けになる人物に、日本を滅亡への戦争に導いた近衛文麿（一八九一～一九四五）がいる。近衛は五摂家（公家）の名家に生まれ、父親が早世したため京大の学生時代から世襲の貴族院議員だつた。



近衛文麿元首相

明治42年、西田が学習院でドイツ語の教授をしていたとき、学生の一人に近衛がいた。当時、近衛の一級上の学生に木戸幸一と原田熊雄がいた。木戸は後に厚生大臣や内務大臣を務め、天皇の側近としても活躍。東京裁判ではA級戦犯として終身刑となる。原田は後に西園寺公望元首相・元老の秘書となつた。二人とも昭和史を知る上で貴重な資料を残している。

西田はその後、京大の哲学教授になり、近衛は東大の哲学科に入学した。明治45年、近衛は京大に転学する（哲学科から法科に移る）。近衛が西田に憧れたことと、親友の木戸や原田が東大法科から京大法科に移つたのが理由だ。こうして西田は、近衛や木戸や熊田ら元学習院のメンバーと西田邸で頻繁に交流するようになった。この京都の地名からとつた「白川パーティー」は途切れたが、20年あまりの時を経た昭和10年頃、熊田が幹事役となり再開された。このときすでに西田は京大を退官し鎌倉に居を構え、近衛、木戸、原田は政界の中心で活躍していた。

昭和12年6月4日、近衛は45歳で内閣総理大臣に就任し、西田にも転機が訪れた。ライプチヒ大学の小林敏明教授は、「西田はこのとき、初めてリアルポリティックス（現実政

近衛を意識した。西田はそのパイプを使いながら、何とかして自分の意見を反映できないかと考えた」と語る。(NHK教育「日本人は何を考えて来たのか 近代を超えて、第11回 西田幾多郎と京都学派」平成26年1月20日放送)

近衛政権下では、日本と世界をゆるがす数々の大事件が起きた。昭和12年の7月7日柳条湖事件、同年8月13日、第二次上海事変、同年12月、南京事件(南京大虐殺)であり、日中戦争が始まつた。これらをすべて近衛一人に責任を負わせることはできないが、その後の政治家としての対応はお粗末だつた。

日中とも友好国だつたドイツは、日中の和平交渉に尽力していた。それにも関わらず、昭和13年1月16日、近衛は「(蒋介石の)国民政府を相手とせず」と声明を発表した。これにより日中戦争は泥沼にはまり込んでいく。

この時代、近衛の勇ましい演説は、鶴彬が川柳で詠んだ「屍のいないニュース映画」とともに映写され、国民を扇動していくことになつた。

この映像は、靖国神社境内にある戦争博物館「遊就館」の、大東亜戦争I(靖国神社では日中戦争と呼ばない)を解説するコーナーで見ることができる。当時は現在のような世論調査などなかつたが、高貴で若く演説の上手い近衛には国民的人気があり、日中戦争の大勝利のニュースに国民は歓喜した。

鶴彬はこのような時代背景の中、昭和12年12月、治安維持法違反容疑で逮捕され、昭和13年9月14日、獄死した。西田が首相の相談相手だったのとは対照的である。

近衛は内政にも大きな足跡を残した。昭和12年、文部省より『國体の本義』という本が

出版され、国家により思想統制は強められた。昭和13年4月、「國家総動員法」が制定され、国民は国家の駒となり、天皇の盾となつた。同年11月、近衛は「東亜新秩序」を声明。これは西田の弟子、三木清の影響を受けたものだ。同年11月「日独伊三国防共協定」を結び、日独伊三国同盟の礎になつた。

近衛は一旦首相の座を退き、平沼騏一郎(検事総長)、安部信行(陸軍大将・金沢市出身)、米内光政(海軍大将、盛岡市出身)と、何も進展のないまま半年たらずで首相がコロコロ変わる時期を経て、昭和15年7月、近衛は再び首相となり、やり残したことをやり始める。

葬列めいた花嫁花婿の列へ手をあげる
ヒットラー

ユダヤの血を絶てば狂犬の血が残るばかり

これらは鶴彬の川柳(昭和12年)である。鶴彬は、ドイツが滅亡への戦争を始めることを予感していたが、日本はドイツに近づいていく。

日中戦争を肯定した西田

昭和15年9月、近衛は、すでにヨーロッパで第二次世界大戦を始めていたドイツのヒトラー、イタリアのムッソリーニと「日独伊三国同盟」を結び、仏印(フランス領インドシナ・現ベトナム・ラオス)北部に進駐し、英米を激怒させた。

昭和15年11月、大政翼賛会が設立された。ここに政党政治は終わり、日本は完全なファシズム国家となつた。同年、西田は『日本文

化の問題』という論文を書いている。ここで「最も戒むべき問題は、日本を主体化すること」とする。一方で「従来、東亜民族は、ヨーロッパ民族の帝国主義の為に、圧迫せられていた、植民地視されていた、各自の世界史的使命を奪われていた。」中略「今日の東亜戦争は後世の世界史に於いて一つの方向を決定するものであろう」と、日中戦争を肯定している。

内地人に負けてはならぬ汗で半定歩のトロ押す(※半定歩は半分の給料)半定歩だけ働けばなまけるなどやされるヨボと辱しめられて怒りこみ上げる
朝鮮語となる

母国掠め盗つた国の歴史を復習する大声

これらは鶴彬が日本の植民地にされた東亜の人々の心情を詠んだ川柳である(昭和11年)。日本民族のしたことは、ヨーロッパ民族になりかわり、東亜を植民地化することに他ならなかつた。しかし、西田には東亜の人たちは日本をどう見ていくかという想像力が全くなかった。西田は自身の人生を振り返り「前半は黒板を前にして坐し、その後半は黒板を背にして立つた。黒板に対して一回転をなしたと云えど、私の伝記は尽きる」と語っている。まさにその通りで、西田は外で起きている現実を見ないで原稿用紙に机上の空論を描いていたのだ。

昭和16年の春、近衛は対立していた日米関係を開拓しようと交渉を始める。西田は「Kは、今度は真剣にやつてゐる様で私も大いに喜んでいる(※K=近衛)」と友人・堀尾孝へ手紙に書いている。その束の間、近衛政権

は仏印南部まで侵攻させ、日米交渉を決裂させた。対英米戦(太平洋戦争)が目前に迫った10月、近衛は突然首相の座を放り出し、陸軍大臣だった東条英機(陸軍大将)に引き継がれ、同年12月8日、太平洋戦争が始まった。戦犯と言えば、太平洋戦争を始めた東條英機ばかりが悪名高いが、それまでの土台を作ったのは近衛文麿である。一般論として、最大の戦争責任者は近衛と東條ということになる。

満州事変から始まる十五年戦争は軍部の暴走だったと一言で片づけられることもあるが、軍部と一体となって日本を戦争の渦に導いた近衛の責任と、そのバックボーンとなつた哲学者たちの責任は重い。なぜあの時代、国民は近衛や東條を熱狂的に支持したのか。それを解明しなければ、戦争について理解はできないだろうし、同じ過ちを繰り返す。あの時代は、日本全体が狂っていた。文学も芸術も宗教も、そして哲学でも。鶴彬のような人は告発され弾圧されたのである。

いずれにせよ、近衛・東條という二人のリーダーの下で始められた戦争により、日本人三百十万人が亡くなり、二千万人以上といわれる外国人が亡くなつた。

戦争責任者・近衛と西田の蜜月

戦後、東條は東京裁判でA級戦犯として絞首刑になつた。一方で近衛は、自分が戦犯リストに載つていることを知るや否や青酸カリを服用し自殺した。潔く自殺したのではない。死の直前まで政界復帰を画策し、GHQに取り入るため憲法改正に奔走した。もち



西田幾多郎㊂と三木清

ろん周囲の目は冷ややかであった。近衛に残された最後の責任は、眞実を語つて死刑になることだつたと思う。しかし近衛は最後の責任さえも放棄した。繰り返すが、その近衛と蜜月関係にあつたのが西田幾多郎である。遡ること昭和15年、西田には文化人としては最高の栄誉である文化勲章が授与された。そのときの首相は近衛である。西田記念館には勲章を下げた西田の誇らしげな写真が飾られている。あれは、数えきれない人々の血にまみれた勲章である。

西田の優秀な弟子の一人に哲学者・三木清(一八九七~一九四五)がいる。三木は西田に憧れ、京大で西田のもとで学んだ。その後、ドイツに留学し哲学者・ハイデッガーに学んだ。その後フランスのパリに移り17世紀フランスの哲学者・パスカルを研究。帰国後は法政大学教授となる。三木は、実存主義、自由主義などだが、マルクスの研究者となり、昭和5年、共産党に資金提供したという理由で、治安維持法違反で逮捕され教職を追われた。昭和8年、近衛のブレントラスト「昭和研究

会」に参画し、その中心メンバーとなつていった。西田は昭和研究会のヒアリングを受けている。

昭和14年、三木は昭和研究会の「新日本の思想原理」という本の中で「東亜共同体論」を構想し、観念論だつた西田哲学を具体的な形にした。これが近衛の声明した「東亜新秩序」となり、後の「大東亜共榮圏」や「大東亜戦争」につながっていく。

太平洋戦争開戦直後の昭和17年、三木は陸軍宣伝班員として徴用され、フィリピン人に東亜解放の真義を徹底して宣伝する任務が課せられた。三木はフィリピンで10ヶ月を過ごし、戦場の現実を見た。昭和18年、三木は『南方から帰つて』という論文にこう書いている。

「私が戦場において経験したのは、近代戦というものの、仮借なき非情性であつた。」中略――日本が当面している厳しい現実は、甘い観念論、浪漫的な形而上学で乗り切れるものではないのである。

三木はかつての自分のように、理屈で戦争を肯定する哲学者たちを批判した。もちろん師の西田にも向けられたものだろう。もし西田が三木のように日本の侵略戦争の実態を見て、東亜の人々の怒り悲しみを知つたならば、何を思つただろうか。

帰国後の三木は、再びマルクスの研究に戻り、最後は親鸞を研究した。昭和20年6月、三木は拘束された。拘留中の共産党員の知人が父の葬儀のため仮釈放中に逃亡し、三木の家を訪ねたたというのだが、その理由だ。三木は戦後の9月26日に豊多摩刑務所で獄死した。

西田の家に陸軍幹部が出入り

思想的には右へ左へと急旋回を描きながら生きた三木ではあるが、最後には戦争を反省した。これに対して、西田は反省することもなく政界で暗躍し続けた。西田の家には陸軍幹部が出入りしていた。西田自身も軍の関係する「国策研究会」に出席していた。(これは『世界新秩序の原理』にも触れられている)。

昭和18年6月、東條の側近であった佐藤賢了陸軍軍務局長は、東條首相が大東亜共栄圏の新政策を発表する演説原稿を依頼した。西田は自分の考えが取り入れられることを期待し寄稿した。その要旨が西田哲学館に保管されている。

「各国家民族が各自の世界的使命を自覚して、地域伝統に従つて、一つの特殊的世界を構成せなければならない。これが共栄圏の原理である。その中心となつて之を担うものがなければならない。東洋に於いては今日それは我が日本その他にない」

西田がその3年前に書いた『日本文化の問題』の中では、「日本を主体化することを戒むべき」といつていたが、ここでは日本が「主体化」されている。西田の演説原稿は、東條に採用されなかつた。西田は、弟子の和辻哲郎に手紙を送り「東條の演説には失望した。あれでは私の理論が少しも理解されていない」と嘆いている。こうした西田と軍部の関わりは、前述のNHKの特番「日本人は何を考えて来たのか 西田幾多郎と京都学派」でも紹介され、西田のイメージは全国的に悪くなつた。

東條の演説原稿は、思想家・大川周明が書

いていた。大川は戦後東京裁判でA級戦犯となり、裁判中に東條の頭を叩くなど精神錯乱状態となり不起訴になつた人物である。その大川が書いた「大東亜共同宣言」は「英米は自己の繁栄のために、東亜諸国に侵略と搾取を行い、野望をむき出しにして東亜諸国の安定を覆そうとしている。そこで東亜の諸国は、手を取り合つて大東亜戦争を戦い抜き、英米の抑え付けから解放し、自存自衛をまつどうし、大東亜を確立し、世界平和に寄与する」という内容で、東亜諸国の「共存共栄」「自主独立」「文化交流」などときれいごことが並んでいる。

実際の日本軍は東亜諸国を軍事力で支配した。輸送路を断たれ日本兵は、食料を調達するために現地の住民から略奪した。ゲリラや敵のスパイだと疑われた現地住民をことごとく虐殺した。そのため戦後、BC級戦犯になつた日本兵は約五七〇〇人。そのうち約千人の日本兵が死刑になつた。

勇ましい大川の原稿に比べれば、西田のそれは観念的ではある。しかし日本が東亜諸国の盟主となり東亜に平和をもたらすという趣旨は同じである。もし西田の原稿が東條に採用され、もし西田が生きていれば大川のようないい」と嘆いている。こうした西田と軍部の関わることは、前述のNHKの特番「日本人は何を考えて来たのか 西田幾多郎と京都学派」でも紹介され、西田のイメージは全国的に悪くなつた。

昭和20年6月7日、西田は病死した。同年8月15日、日本は敗戦した。

文化勲章返上した徳富蘇峰

西田同様、戦時下で文化勲章をもらつた人物に、徳富蘇峰がいる。国民を戦争へと扇動したジャーナリストだ。戦後、徳富はA級戦

犯容疑をかけられたが、高齢と病気のため不起訴となつた。徳富は戦後、隠遁生活を送り、言論人の道義的責任をとるとして文化勲章を返上した。もし西田が生きていたら、道義的理由で文化勲章を返上しただろう。「自覚」とか「反省」とか偉そうなことを言つてゐる人物が、戦争責任の自覚もできず、戦争の反省もできないとなれば、全国民から罵倒が浴びせられよう。もし「西田先生は文化勲章を授与されるほどの立派な哲学者だ」と思つてゐる人がいるとするならば、その人の頭の中は「無」になつてゐると言わざるえない。

残念ながら、かほく市に雇われている学者たちは、西田の闇の部分を語らない。西田哲学館に行けば分かるが、西田と近衛との関係を隠している。かつて西田哲学館には数々の勲章で飾られた近衛文麿の誇らしげな写真が堂々と飾られ、西田は首相を教えたすごい哲学者であるという趣旨の説明文があつた。私はここを訪れる度にこの展示を苦々しく眺めていたが、いつの間にか近衛の写真も解説も撤収されていた。哲学館の関係者がNHKの特番を見て、これはまずいと思つたのだろうか。

私は西田哲学館の窓口の女性に近衛の展示について聞いてみた。すると「近衛文麿って誰ですか?」と聞き返された。本当に知らないといふ顔をしていた。ヒトラーを知らないドイツ人はいないが、近衛を知らない日本人は大勢いる。この国の悲しい現状だ。近衛は中学校の歴史の教科書には必ず載つている人物だが、日本では平和教育が十分にされてこなかつたため、素通りされているのだろう。それにしても西田哲学館の窓口担当が「近衛

を知らない」というのは恥ずかしい。窓口の女性は、奥の間にいたベテラン職員を呼んできた。私はその人にも同様の質問をした。職員は表情をこわばらせ「近衛文麿の写真は、はじめからありませんでしたよ」と返答した。私が「隠さなくていいんですよ」と言つても「別に隠してはいませんよ。近衛文麿の手紙もちゃんと引き出しに入っていますよ。見たいなら、いつでもお見せしますよ」と答えた。嘘をついたり、都合の悪いものを人目につかないところに移すことを日本語で「隠す」という。私は、「近衛文麿の写真があつてもいいんですよ。西田の表も裏も展示して下さい」と注文をつけた。

なぜ私は西田に関心を持ったのか。私は20数年前(高校時代)に座禅体験し、禅や仏教に興味を持ち始め、駒澤大学では仏教学を専攻した。今は引退して久しいが、そこには袴谷憲昭という仏教学では世界的に有名な教授がいて、「禅は仏教ではない」と説いていた。先生の真意を理解しようとしたが、本最大の禅宗の僧侶たちはこれに激怒し、袴谷先生を「仏敵」とバッティングしていた。禅道場で袴谷ゼミだと言おうものなら先輩僧侶からのイジメにあうほどであった。袴谷先生は曹洞宗の僧侶であつたが、曹洞宗の中では「袴谷は破門になつた」とささやかれていた。私がその真偽を先生に直接うかがうと、「自分から僧籍を捨てました。ですが私は仏教徒です」と答えておられた。

「禅は仏教ではない」と袴谷教授

私は当時、曹洞宗の学僧であつたが、なぜ

袴谷先生が「禅は仏教ではない」と言つているかに興味を持ち、先生の書物や論文を読み、先生の講義を受けた。講義の常連は私を含め数人で、大学院生や定年退職後の聴講生が中心であった。20人ほどいた学生が数名に減った頃、「今日の講義は居酒屋でします」と言い、酒を交わしながら受けた講義もいい思い出となつている。袴谷先生は、仏教の大論争の中で大学から短大(夜間)へと移り、大学にいた私は、ゼミや卒論の担当教授を頼めなかつた。だが、袴谷先生は学生時代に私が最も影響を受けた先生であり、学問の面白さを教えてくれた先生でもあった。

袴谷先生は、雑誌「正論」で保守の論客・曾野綾子氏とも論争をしたり、哲学者・梅原猛氏や宗教学者・中沢新一氏なども批判していた。ちょうど地下鉄サリン事件もあり、オーム真理教が話題となつていた。当時の仏教学者たちは、オームはテロリストなので自分たちとは関係ないという立場だったが、オームの教義を論じ、どこが仏教ではないかという視点で批判していたのは袴谷先生だけだつたと思う。

また袴谷先生は、『国体の本義』を批判的に解読する講義もされた。『国体の本義』は戦後GHQにより発禁になり、現在では知る人もいない。当時私は、平和問題には全く関心がなく「仏教を学びにきたのに、何でこんなものを解説するのか」と思いながら講義を受けた。だがこれが、意外と面白かった。

西田哲学の原点は、座禅体験(臨済宗)にある。西田は東洋思想(特に仏教の本覚思想や華嚴思想に基づく禅)を西洋の哲学用語で解説しようと試みた。袴谷先生は、西田たちが思ひ描いていた仏教は、お釈迦様の説かれた仏教ではないとして批判した。すなわち「人間は本来覚っている(本覚思想)」「人間には仮性がある(如來藏思想)」「人間だけではなく、山や川や草や木などすべてのものに仮性がある(山川草木悉有仮性)」といった思想

『国体の本義』は、昭和12年(近衛政権)で文部省が国民を洗脳するために作つた本であ

つであり、一つのものがすべてである（一即多「多即一」）といふ華厳思想も仏教ではない。

華厳宗の大本山は奈良の東大寺である。太陽を象徴する大日如来が奈良の都に鎮座し、日本のすみずみまで御加護をもたらすという思想に基づき大仏は建立された。日本伝統の本地垂迹説によれば、太陽を象徴する天照大御神は、大日如來の権現（仮の姿で現れたもの）であるとされる。西田は、天照大御神にはじまる万世一系の天皇を八紘一宇の歴史的原理になると考へていた。その皇道が東アジア、さらには全世界にまで広がっていくだろうと考へていた。

華厳思想は、茶道、華道などの日本文化にも影響を与えた。一杯の茶に世界を見、一輪の花に世界を見るのである。趣味として楽しむならよいのであるが、これが國家と個人ともいう問題に結びつくと危険である。先にも述べたが、華厳思想はお釈迦様の説かれた仏教ではない。仏教の根本原理である「縁起」とは、華厳思想や本覚思想のような空間的概念ではなく、あくまで時間的概念なのである。袴谷先生によれば、時間的な縁起説に基づいた禅ならば仏教であるといえる。

私は、西田哲学が仏教ではないものに基づいていたといふことを証明することよりも、西田哲学が日本の侵略戦争に与えた影響やそれがならないと考える。西田シンパの学者たちの中には、西田の日記や友人への手紙を根拠に「本当は戦争に反対していた」と西田を擁護する学者もいる。だが、これは意味がない。それを言い始めれば、東京裁判で裁かれた人たちも、真珠湾攻撃を遂行した山本五十六も、「本当は戦争に反対だった」ということになる。「戦争してみたかった」などと言う人はいない。多く人が戦争は避けたいと考える。それでも戦争になってしまう。大事なのは何を思ったかではなく、何を発信し、実行したかである。



かほく市の丘に立つ西田幾多郎哲学館

1億円のLEDと7万円の万灯会

西田幾多郎は、顕彰に値する人物ではないことが明らかになってきた。だが残念ながら、いまだにかほくの市政に関わる人の中には、西田哲学も歴史的背景も勉強しないで、

西田を素晴らしい哲学者だと勘違いしている人もいるようだ。世界的建築家・安藤忠雄の設計した石川県西田幾多郎記念哲学館の「哲学の丘」に、市税1億円を投じてLED

のイルミネーションを設置する。そうだ。最近、全国あちこちでイルミネーションが流れる。哲学館には人が来ないので、少しでも観光客を集めることが狙いだらう。だが、共感

で、その運営はすべてボランティアだ。1億円あれば、万灯会が二百回以上できる計算になる。私はかほく市の生涯学習フェスタに、以下の川柳を飾った。

されないものには集まらないだろう。そもそも、哲学は「言葉」による学問である。電飾でごまかすべきではない。歴史や哲学をよく理解している人から見れば、この愚行には呆れるだろう。

同じイルミネーションでも鶴彬の万灯会は寄付金でまかなわれている。7万円ほど予算で、万灯会が二百回以上できる計算に、以下の川柳を飾った。

以下の一編がその一つだ。

戦犯の師を市の税で賛美する
哲学の丘光らせる一億円
戦争に反対した鶴まだ日陰

間違いだらけ、市発行の西田漫画

平成26年、かほく市は西田幾多郎の学習漫画を三百万円の市税をかけて作った。西田が苦学して大学教授なり、最後には文化勲章をもらったというサクセスストーリーだ。西田哲学について基本から間違いだらけである。例えば漫画の西田が生徒たちに「純粹経験と呼ぶことにした」と自らの発見した功績のように語るが、純粹経験は米国の哲学者の考えた概念である。これは西田幾多郎著『善の研究』にも書いてある。

また漫画の西田が生徒たちに「社会や周りの風潮にも飲み込まれず、自分の個性を突き進め」と力説するが、西田哲学は「全体主義」であり、まったく逆である。社会の風潮に逆らうと投獄される時代である。そして西田漫画では禅を世界に広めたかのよう描き方だ。西田は哲学者である。禅を世界に広め

たのは西田の親友で仏教学者の鈴木大拙（金沢市出身）である。西田と近衛との関係は最重要であるが、近衛が登場するのは、近衛の学生時代の1ページだ。しかも漫画の女の子に「未来の総理大臣を教えるなんてすごいね」とバカなことを言わせている。近衛が戦争に関与したことも西田自身が関与したこと、言及されない。西田が戦争に反対した人であつたかのような嘘まで描かれている。あの時代に反戦を訴えて、文化勲章がもらえると思うのか。鶴彬は国家によつて殺されているのだ。「世界に影響を与えた日本人初の哲学者」という表紙にも疑問符が付く。後半は正しい。だが、哲学を学んだ人なら常識であるが、西田哲学は世界に影響を与えていない。第二次世界大戦に影響を与えたといふ意味なら正しいが、この漫画には西田の戦争責任は全く描かれていない。

子どもたちいでたらめを教える漫画の他にも、市は哲学館の企画運営費や人件費などに年間数千万円という莫大な市の予算が投じら

西田幾多郎学習漫画

れている。その一方で、鶴彬の予算は全くない。丘を光らせる予算があれば、鶴彬の短冊を文化財にして保護をするとか、鶴彬の句碑の案内板を作るとか、もつと有意義なことができる。鶴彬の短冊を世界記憶遺産にする運動をしてよいはずである。日本の侵略戦争に加担した哲学者を顕彰し、その戦に反対した川柳作家を顕彰しない市政には、呆れるばかりである。

かほく市の姉妹都市、ドイツのメスキルヒ市は、ドイツの哲学者ハイデッガー（一八八九年～一九七六）の故郷である。ハイデッガーはナチス・ヒトラーの御用学者として有名である。西田とハイデッガーは面識はないが、西田の弟子には三木清（他に、和辻哲郎や西谷啓二（石川県能都町出身）などハイデッガーももとで学んだ哲学者がいる。いずれも戦争に協力した。三木が獄死したことは述べたが、和辻や西谷は戦後、公職追放となつた。

国家主義者ハイデッガーとの糸

ヒトラーが政権についた一九三三年（昭和八年）、ハイデッガーはフライブルク大学の総長に就任し、「ドイツ大学の自己主張」という演説をした。「（ドイツの大学は）ドイツ民族の命運の統率者・庇護者を教育し統治するもの」であるとし、「民族の精神世界」とは「民族の血と大地に根差すエネルギーをば最深部において保守する勢力をば最深部にて保守する威力」とする。ドイツ国民には民族共同体のための「勤労奉仕」「国防奉仕的奉仕」の3つの義務が課せられる。こうした異常ともいえる国家主義が、日本だけにな

2017年 新年あけましておめでとうございます

浄専寺 毎月の聞法の集い (PM 7:30~)

- 第1日曜 「ブッダ・カフェ」（担当：平野喜之）
親鸞が出遇った仏法に人間の闇を学んでいく会。
- 第2日曜（又は第3）「生きることを学ぶ会」
人間と世界、それをどう考え、どう生きるかが宗教の課題です。しかし現代社会の状況からの問いかけに無責任な私がいます。さまざまな問題を自己の課題として荷っておられる方を講師に迎えて、社会の闇を学びその闇を作っている私たちの方を学ぶ会。
- 第3日曜（又は第4）「大地の会」（担当：平野道雄）
「生きることを学ぶ会」と「ブッダ・カフェ」で学んだことを共に確かめ合う会。
◎現代社会の状況からの問い合わせと、教法からの呼びかけが交差するところに身を据えることが聞法するということではないでしょうか。

ホームページ「かほく市 浄専寺」

くドイツでも興っていた。

近衛とヒトラー、西田とハイデッガーといふ図式を理解しているかほく市民は、一体どれだけいるか。かほく市はこの姉妹都市の交流で、一体何をしたいのか。あの時代の反省をするなら意義もあるが、そのような話は一切ない。

かほく市には、「にやんたろう」というゆるキヤラがいる。これはハイデッガーの故郷メスカルヒ市の猫祭りと、西田幾多郎の「たろう」を融合させた化け物である。西田の飼っていた猫も、ゆるキヤラの由来としてこじつけられている。かほく市の子どもたちは、何も知らずに第一次世界大戦とゆかりがある「にやんたろう」の描かれた黄色いカバーのランドセルを担いで元気に登下校している。

鶴彬 最後の6句

高梁の実りへ戦車と靴の鉢
屍のいないニュース映画で勇ましい
出征の門標があつてがらんどうの小店
万歳とあげて行つた手を大陸において來た
手と足をもいだ丸太にしてかえし
胎内の動き知るころ骨がつき

新秩序の原理』（昭和18年）を紹介する。西田が陸海軍の軍人たちに講義したもので西田自身がまとめたものである。身の毛もよだつ論文である。私には、これが近衛政治の設計図に見えてくるのだ。

戦争を語るには経済問題が欠かせないが、西田にその視点はなく、全て観念論で説明している。鶴彬が現実の戦争を直視した最後の六句を詠んだのに対して、西田は非現実的で夢想的な論文でしめくくつた。同時にこの論文はナショナリズム、反グローバル精神に満ちあふれ、内向きで視野の狭さがうかがえる。

西田は自身の哲学を、いわゆる全体主義ではないという。だが西田の主張する皇道、八紘為宇（八紘一宇）、東亜共榮圏の思想が、全體主義ではないと納得できる人はいないだろう。私が傍線を引いたところは、日本の侵略戦争を正当化し、國家滅亡への戦争へと導いた部分である。最後の一文（太字部分）は狂気である。この論文を読めば、西田哲学はすでに自己崩壊していることが読み取れよう。

身の毛もよだつ西田の論文

私は西田について厳しく批判した。だが百聞は一見に如かずである。私が批判するまでもないのかもしれない。西田哲学の最後を飾り、西田哲学の集大成ともいえる論文『世界

世界新秩序の原理

西田 幾多郎

世界はそれぞれの時代にそれぞれの課題を有し、その解決を求めて、時代から時代へと動いて行く。ヨウロッパで云えば、十八世紀は個人的自覚の時代、所謂個人主義自由主義の時代であった。十八世紀に於ては、未だ一つの歴史的世界に於ての国家と国家との対立と云うままでに至らなかつたのである。大まかに云えば、イギリスが海を支配し、フランスが陸を支配したとも云い得るであろう。然るに十九世紀に入つては、ヨーロッパという一つの歴史的世界に於てドイツとフランスとが対立したが、更に進んで窮屈する所、全世界的空間に於て、ドイツとイギリスとの二大勢力が対立するに至つた。これが第一次世界大戦の原因である。十九世紀は国家的自覚の時代、所謂帝国主義の時代であった。各国家が何處までも他を従えることによつて、自己自身を強大にすることが歴史的使命と考えた。そこには未だ国家の世界史的使命の自覚といふものに至らなかつた。国家に世界史的使命の自覚なく、単なる帝国主義の立場に立つたがり、又逆にその半面に、階級闘争と云うものを免れない。十九世紀以来、世界は、帝国主義の時代たると共に、階級闘争の時代でもあつた。共産主義と云うのは、全体主義的ではあるが、その原理は、何處までも十八世紀の個人的自覚による抽象的世界理念の思想に基くものである。思想としては、十八世紀的思想の十九世紀的思潮に対する反抗とも見ることができる。帝国主義的思想と共に過去に過去に属するものであろう。

今日の世界は、私は世界的自覚の時代と考
える。各国家は各自世界的使命を自覚するこ
とによって一つの世界史的使命即ち世界的世
界を構成せなければならない。これが今日の
歴史的課題である。第一次大戦の時から世界
は既に此の段階に入ったのである。然るに第
一次大戦の終結は、かかる課題の解決を残し
た。そこには古き抽象的世界理念の外、何等
の新らしい世界構成の原理はなかつた。これ
が今日又世界大戦が繰返される所以である。
今日の世界大戦は徹底的に此の課題の解決を
要求するのである。一つの世界的空間に於
て、強大なる国家と国家とが対立する時、世
界は激烈なる闘争に陥らざるを得ない。科
学、技術、経済の発達の結果、今日、各国家
民族が緊密なる一つの世界的空間に入ったの
である。之を解決する途は、各自が世界史的
使命を自覚して、各自が何処までも自己に即
しながら而も自己を越えて、一つの世界的世
界を構成するの外にない。私が現代を各国家
民族の世界的自覚の時代と云う所以である。

各国家民族が自己を越えて一つの世界を構成
すると云うことは、ウイルソン国際連盟に於
ての如く、單に各民族を平等に、その独立を
認めるという如き所謂民族自決主義ではな
い。そういう世界は、十八世紀的な抽象的世
界理念に過ぎない。かかる理念によつて現実
の歴史的課題の解決の不可能なることは、今
日の世界大戦が証明して居るのである。いず
れの国家民族も、それぞれの歴史的地盤に成
立し、それぞれの世界史的使命を有するので
あり、そこに各国家民族が各自の歴史的生命
を有するのである。各国家民族が自己に即し
ながら自己を越えて、一つの世界的世界を構成
すると云うことは、各自自己を越えて、それ

ぞれの地域伝統に従つて、先ず一つの特殊的
世界を構成することでなければならぬ。而
して斯く歴史的地盤から構成せられた特殊的
世界が結合して、全世界が一つの世界的世界
に構成せられるのである。かかる世界的世界
に於ては、各国家民族が各自の個性的な歴史
的生命に生きると共に、それぞれの世界史的
使命を以て一つの世界的世界に結合するので
ある。これは人間の歴史的發展の終極の理念
であり、而もこれが今日の世界大戦によつて
要求せられる世界新秩序の原理でなければな
らない。我国の八紘為宇の理念とは、此の如
きものであろう。畏くも万邦をしてその所を
得せしめると宣らせられる。聖旨も此にある
かと恐察し奉る次第である。十八世紀的思想
に基く共産的世界主義も、此の原理に於て解
消せられなければならない。

2017年 新年あけましておめでとうございます

(有) 今 鉄工所

代表 今 淳志

〒929-1215 かほく市高松 才24-1 (南新町)

☎076-281-1415 (自) 076-281-0561

勝利が今日までのヨーロッパ世界の文化発展の方向を決定したと云われる如く、今日の東西戦争は後世の世界史に於て一つの方向を決定するものであろう。

今日の世界的道義はキリスト教的な博愛主義でもなく、又支那古代の所謂王道という如きものでもない。各国家民族が自己を越えて一つの世界的世界を形成すると云うことではなければならない、世界的世界の建築者となると云うことでなければならない。我国体は単に所謂全体主義ではない。皇室は過去未来を包む絶対現在として、皇室が我々の世界の始であり終である。皇室を中心として一つの歴史的世界を形成し来つた所に、万世一系の我国体の精華があるのである。我国の皇室は単に一つの民族的国家の中心と云うだけない。我国の皇道には、八紘為宇の世界形成の原理が含まれて居るのである。

世界的世界形成の原理と云うのは、各国家民族がそれぞれの歴史的地盤に於て何處までも世界史的使命を果すことによつて、即ちそれぞれの歴史的生命に生きることによつて、世界が具体的に一となるのである、即ち世界的 세계となるのである。世界が具体的に一となることは各自が各自自身となることであり、各自が各自自身となることは全体が一となることである。私の世界と云うの

は、個性的統一を有つたものを云うのである。世界的世界形成の原理とは、万邦各その所を得せしめると云うに外ならない。今日の東西戦争は、かかる世界的世界形成主義に基盤附けられていなければならない。単に各国家が各国家にと云うことではない。今日の世界状勢は世界が何處までも一となざるべからざるが故に、各国家が何處までも各自に國家主義的たらねばならぬのである。而してかかる多と一との媒介として、共栄圏という如き特殊的世界が要求せられるのである。

我國民の思想指導及び学問教育の根本方針は何處までも深く国体の本義に徹して、歴史的現実の把握と世界的世界形成の原理に基かねばならない。英米的思想の排撃すべきは、自己優越感を以て東亜を植民地視するその帝国主義にあるのでなければならない。又国内思想指導の方針としては、較もすれば党派的に陥る全体主義ではなくして、何處までも公明正大なる君民一体、万民翼賛の皇道でなければならない。

以上は私が国策研究会の求に応じて、世界新秩序の問題について話した所の趣旨である。各国家民族が何處までも自己に即しながら、自己を越えて一つの世界を形成すると云うことは、各国家民族を否定するとか軽視するとかと云うことではない。逆に各国家民族が自身に還り、自己自身の世界史的使命を自覚することによって、結合して一つの世界を形成するのである。かかる綜合統一を私は世界と云うのである。各国家民族を否定した抽象的世界と云うのは、実在的なものではない。従つてそれは世界と云うものではない。故に私は特に世界的世界と云うのである。従来は世界は抽象的であり、非実在的であった。併し今日は世界は具体的であり、実在的であるのである。今日は何れの国家民族も単に自己自身によつて存在することはできぬ、世界との密接なる関係に入り込むことはできぬ、否、全世界に於て自己自身の位置を占めることなくして、生きることはできぬ。世界は単なる外でない。斯く今日世界が実在的であると云うことが、今日の世界戦争の原因であり、此の問題を無視して、今日の世界戦争の問題を解決することはできない。私の世界と云うのは右の如き意味のものであるから、世界的世界形成と云うことは、地域伝統に従つてと云うのである。然らざれば、具体的世界と云うものは形成せられない。私の云う所の世界的世界形成主義と云うのは、他を植民地化する英米的な帝国主義とか連盟主義とかに反して、皇道精神に基く八紘為宇の世界主義でなければならない。抽象的な連盟主義は、その裏面に帝国主義に却つて結合して居るのである。

歴史的世界形成には、何處までも民族と云うものが中心とならなければならない。それは世界形成の原動力である。共栄圏と云うものであつても、その中心となる民族が、国際連盟に於ての如く、抽象的に選出せられるのではなく、歴史的に形成せられるのでなければならぬ。斯くして眞の共栄圏と云うものが成立するのである。併し自己自身の中に眞の世界性を含まない單に自己の民族を中心として、そこからすべての世界を考える單なる民族主義は、民族自己主義であり、そこから出て来るものは、自ら侵略主義とか帝国主義と

か云うものに陥らざるを得ないであろう。今日、英米の帝国主義と云うものは、彼等の民族自己主義に基くものに外ならない。或一民族が自身の中に世界的世界形成の原理を含むことによつて始めてそれが眞の国家となる。而してそれが道徳の根源となる。国家主義と單なる民族主義とを混同してはならない。私の世界的世界形成主義と云うのは、國家主義とか民族主義とか云うものに反するものではない。世界的世界形成には民族が根柢とならなければならない。而してそれが世界的世界形成的なるかぎり国家である。個人は、かかる意味に於ての国家の一員として、道徳的使命を有するのである。故に世界的世界形成主義に於ては、各の個人は、唯一なる歴史的場所、時に於て、自己的使命と責務とを有するのである。日本人は、日本人として、此の日本歴史的現実に於て、即ち今日の時局に於て、唯一なる自己の道徳的使命と責務とを有するのである。

民族と云うものも、右の如く世界的世界形成的として道徳の根源となる様に、家族と云うものも、同じ原理によつて道徳の根源となるのである。单なる家族主義が、すぐ道徳的であるのではない。世界的世界形成主義には家族主義も含まれて居るのである。之と共に逆に、共栄圏と云う如きものに於ては、嚮に云つた如く、指導民族と云うものが選出せられるのではなく、世界的世界形成の原理によつて生れ出るものでなければならない。ここに世界的世界形成主義と国際連盟主義との根本的相違があるのである。

神皇正統記が大日本者神國なり、異朝には其たぐいなしという我国の国体には、絶対の「どうもひどい世の中となりました」今後いかがなるか「早く死んだ友人共が幸のよう

以上が、昭和18年、西田の最後の論文である。昭和20年5月、西田が亡くなる一か月前に（日本敗戦3カ月前）、西田が友人（朝永三十郎）に宛てた最後の手紙が残る。

歴史的世界性が含まれて居るのである。我皇室が万世一系として永遠の過去から永遠の未来へと云うことは、単に直線的と云うことではなく、永遠の今として、何処までも我々の始であり終であると云うことでなければならぬ。天地の始は今日を始とするという理も、そこから出て來るのである。慈遍は神代在今、莫謂往昔とも云う（旧事本紀玄義）。日本精神の真髓は、何処までも超越的なものが内在的、内在的なものが超越的と云うことにあるのである。八紘為宇の世界的世界形成の原理は内に於て君臣一体、万民翼賛の原理である。我國体を家族的国家と云つても、單に家族主義的と考えてはならない。何処までも内なるものが外であり、外なるものが内であるのが、國体の精華であろう。義乃君臣、情兼父子である。

我が國の國体の精華が右の如くなるを以て、世界的世界形成主義とは、我國家の主体性を失うことではない。これこそ己を空うして他を包む我國特有の主体的原理である。之によつて立つことは、何処までも我國体の精華を世界に發揮することである。今日の世界史的課題の解決が我國体の原理から与えられる云つてよい。英米が之に服従すべきであるのみならず、枢軸国も之に従うに至るであろう。

西田哲学を顕彰することは、西田自身が是としないのである。顕彰すること自体が空しいのである。私たちのできることは、西田や日本が陥つてしまつた失敗を繰り返さないことをだけである。かほく市は間違つたメッセージを発してはならない。

この西田の手紙に絶望はみられても、反省はみられない。何千万人という犠牲者をだした第二次世界大戦を「面白い」という西田には呆れるばかりである。何よりも注目すべきは、「全体主義」の否定である。西田は自分の夢想していいた世界が崩壊していくのを見たりにし、これまで築きあげてきた自身の哲学を完全に否定したのである。西田哲学の敗北宣言である。

（傍線・寺内）

【主な参考文献】

西田幾多郎著『善の研究』（小坂国継・全注釈）
吉田傑俊著『近代日本思想史論II』『京都学派』の哲学
佐伯啓思著『西田幾多郎 無私の思想と日本人』
永野基綱著『人と思想 三木清』



不戦のつどいで展示された鶴彬のパネル



内灘闘争を語る(左から)西野司典さん、勘昭三さん、杉村竹子さん(金沢駅もてなしドームで)



内灘砂丘地に残っている砲弾の着弾地観測所

12・8 不戦のつどい

内灘基地闘争を語る

石川県勤労者学習協議会会長

西野 司典さん

旧日本軍が無謀な太平洋戦争を始めた1941(昭和16)年12月8日を忘れてはならない日として、75年目のこの日、不戦のつどいが金沢駅のもてなしドーム地下広場で開かれました。(不戦のつどい 2016冬 実行委員会主催)

友禅作家・志田弘子さんの絵画コーナー、悲惨な原爆写真、鶴彬の生涯を描いたパネルなどが展示され、その一角では内灘基地闘争のビデオが上映されました。ビデオのあと、内灘闘争を体験した人たちの生々しいトークが披露されました。

(文責・岩原茂明、角島広治)

内灘闘争のとき私は大学の1年生だったが、「新しい憲法の話」が文部省から出されたものとでも、アメリカの意向で基地が動く実態。アメリカ軍の接收が相次ぎ、日本のあちこちで軍事基地に反対する闘いが起り始めた。東京の立川基地にしてもまだそんな大きな問題になつていなかつた。アメリカ軍が接收した内灘が、最初に非常に大きな問題となつた。

昭和27年9月から始まつた闘いは、4ヶ月間だけ使つて止めるということで、当時補償金が出て、4カ月ならいいだろうということ

で闘いは収束していく。ところが永久接收となりだめだらうと、寮の仲間数人と6月13日に内灘へ行つた。ありがたいことに北鉄労働組合が内灘闘争の先頭に立つていて、軍事物資は運ばないといつていた。

次のはもう、これではだめしかけていつた。そして共産党が石川県だけでなく、福井、富山、大阪からも来た。そういうことを知らずに役場に押しかけた。結局総理来県をさせなかった。みんなが役場に行つた。気がついたときは、はしごをもつて「わー」と警官隊とともに

「永久接收」で怒りに火

石川県勤労者学習協議会会長

西野 司典さん

いう話が持ち上がる。この永久接收という話は、1953(昭和28)年4月いっぱい返ってくると思っておったところ、6月2日の閣議で永久接收という話が決ると同時に、そのまま内灘試射場の、ここからまた新しく村民の闘いが盛り上がりつついく。

6月15日には第一発目が撃たれる。私は大学2年でしたけれども、各クラスも学年全體も内灘の話で持ち切りで、そして授業時間も。休み時間だけでは時間が足りないので、先生に「申し訳ありませんが内灘の打ち合わせさせていただけませんか」とお願いをする

とほとんどの先生が「いいですよ」と。あのときだから先生方も内灘が接收されることには強い警戒感をもつっていたんだと思う。そういうことをしながら一般教養の学生自治会は動いていました。

お母さんは県庁に押し掛けるなどしてい

たが、私たちは現地にいかないとダメだらうと、寮の仲間数人と6月13日に内灘へ行つた。

ありがたいことに北鉄労働組合が内灘闘争の先頭に立つていて、軍事物資は運ばないといつた。結局総理来県をさせなかった。みんなが役場に行つた。気がついたときは、はしごをもつて「わー」と警官隊とともに

もひどいがはしなかつたが、けがをした人はいた。そういうときにぼくらを励ましてくれたのが中央合唱団をやつておられた方たちで、内灘数え歌というのを歌つてそれから一週間座り込んだ。

小さなお子さん連れ、あるいはおばあちゃんがお孫さんを連れて座つていて、それから労働者も座っていた。今でも何かが起つたときに、みんなが協力しあつて、そういう苦しんだ人たちと一緒に運動に加わつていくこと、それが学ばされたことだ。それと併せて、ものごとの本質は何かということをつかむ努力、なんだかわからんままに時間が過ぎたということではなく、先輩や同僚、あるいは後輩とも話しあつて本質を掴む努力が大切だと思う。

そういう話し合いをうたう会の30周年を北國講堂(北國新聞)で開いたとき、今でも歌は好きですが6月14日のぶつかり合い、鉄条網を囲んで頑張ろうと言った。

権現森では15日の朝、辻政信(元陸軍インパール作戦参謀)を載せたバトカーが栗ヶ崎の方から走つて来て、辻政信が「みなさん、危ないから!」、試射が始まりますから」と言ふので、どうしてもそこにおれない。権現森の砂丘の上にたまたま民有地があるので、そこへ行つた。それから約1時間後、私の記憶では8時頃に人がいるのにもかまわず試射が始まつた。それから毎日試射が続いた。そういうことがあつたが、憲法を守るために、今は82歳になりますが、一緒にがんばつといきたい。

私はちょうど20歳で、青年団でした。そして北鉄労働組合にいました。

内灘町は海と河北潟に挟まれた細い漁村です。そして、ほとんどの方が中学校を出てから出稼ぎに北海道の稚内とか羽幌に出て、そこが済むと山口県に出稼ぎに行つて、残つているのは、90%近くが女子ばかり。

お年寄りとか、お母さん方、子どもだけが村を守つていた。河北潟は水のきれいなところでしじみがどれ、ずっと入つても下まで見えるところで、それを採つて晩のおかずにしている。

日本海のほうでは地引網というのがあって、向栗ヶ崎、大根布、宮坂、西荒屋と細い漁村の街です。大根布には役場があり、交番、消防署があつた。

接収の話が出たときには、もちろん若い男の人はいない。おじいちゃん、お母さん、娘、子どもが、話しあつて「接収されたら大変なことになる。細々と生活していたのに、アメリカ人が来たならどうなる。まず生活ができない。海へもいけない。これがお母さん方、また女子青年団のいちばん頭に上つたことだ。

みんなで買い物しながら座り込みをした。また鐵板道路ですね、電車の終点の内灘駅からアメリカ人のおる、砲弾のあるところまで、幅6メーター1キロの鐵板道路が敷かれました。砂浜だからクルマは通れない。鐵板で荷物運んだり、人を運んだり、人を運んアレメリカはトラックで荷物運んだり、人を運んアレ

おかげと年寄りで内灘守る

元北陸鉄道労組 杉村 竹子さん

2017年 新年あけましておめでとうございます

料亭・ビジネスホテル



かほく市高松ナ-13(上伊丹町)

0120-54-0013
㈹(076)281-0013 ㈹(076)281-2306
●宿泊可 ④年中無休 ④36台

ご宿泊
プラン

中陰料理、法事料理、総合仕出し
承ります。

★御予算に合わせて相談に応じます。★送迎バスの利用も可。
★各種カード使用可。

いろり割烹



河北亭1F

●カウンター/10名様、テーブル/6名様
いろり/10席×2
○AM11:30~PM1:30 PM5:00~PM10:00
○毎週火曜日(祝日営業) ④36台



◆宿泊(和室)
(1泊朝食付)

¥5,400~

◆ビジネスコース
(1泊2食付)

¥7,020~

◆シングルコース
(バス・トイレ付)

…

¥7,560~

◆グルメコース
(1泊2食付)

¥10,800~

だり、そういう形だった。

その鉄板道路の向こうで座り込みをした。

そして浜風が暑いのと、砂浜だから頬カムリして鉄板道路の前をアメリカのトラックが行き来するところに交代で座りこんで、「帰つてくれー、帰つてくれー」と怖い顔をして叫んでいたこと、アメリカの兵隊もトラックの上から、こりやお母さん方おるなどわかる形で、300人ほどが鉄板道路に座り込みました。

また権現森のほうには団結小屋があつて、宮坂、荒屋、室のおかかが子どもを抱えて200人から300人おっぱいを飲ませながら、毎日毎日座り込み。行かんと、あの人贊成でないかと思われる所以、とにかく行く。女性の実行委員が昼は座り込み、夜は町長宅などを訪れて追い詰めた。

試射が始まつたときは権現森の座り込みの300メートル先くらいで栗ヶ崎から砲弾が墜ちる。そして破裂する。それはもうすさまじいもので、きれいな砂丘がドバーと穴が空いてその砂煙が立ちあがる、その行方をながめて、これはどうかならんものか、みんな手を合わせながら拌んだ。旦那もみんな出稼ぎでいいし、女、子どもばかりで、こんどは外部から学生・労働者の方が、北陸鉄道(労働組合)とは特に仲良く交流していたので、いち早く県外の労組にも呼び掛けても

らつて、北鉄の方も内灘の方へ旗を立てて、石炭とか、それから国勞とか自腹で行使し、それでおかかたちは力をいただいた。

金沢大学の方もいたけど、東京やら名古屋から、関西から、運転士は学生はお金もないし顔パスで乗せたという話もある。そして、大根布の青年会館で男女30人くらいが寝泊まりしていたが、私たちがしじみを

とつて、晩御飯のおかずにして教えたりした。

団結小屋におにぎりの差し入れで私や青年団の人が浜までもつていって、どうにか

みんなの協力で闘い続けた。

それから婦人会は婦人会で東京に陳情に行つた。また内灘村の村會議員も行つた。

労働組合も行つた。私も含めて8名、男5名女3名で東京に一週間陳情に行つた。渋谷のお寺で宿泊して、国会の廊下の中を当時の社会の秘書の方に案内してもらつて回つた。

そのとき向こうから伊闌国際局長が歩いてきた。秘書の方から「あれは局長や」と聞いて私たちはバーとかけより「内灘を返してください。内灘を返してください」といつた

ら、まさか国会の廊下で内灘とは思わないから「おまえら、内灘のものか」と言われた。「内灘です。返してください」といつたら、

動しながら宿舎に帰つた。そんな活動を1週間ほどした。

座り込みは毎日は大変なので、交代にしたりがんばつた。そのときに、実行委員の出島権次さん、「町長はともかくもの足りん」ということで反対の人を選んで、そろつてい

る大根布青年会館を事務所にした。そしてほ

とんどがおかかたなんです。おかかたちは

ところが、前の戦争・「太平洋戦争」の終わり頃、日本が支配していたこの「朝鮮」を、北からソ連軍が、南からアメリカ軍が日本軍を追い詰め、双方がぶつかつたところが「38度線」そこで休戦協定が結ばれたのである。このような経緯で、ロシアが影響力をもつ「北朝鮮」とアメリカが影響力をもつ「南朝鮮」というように朝鮮民族は悲惨にも二分されたのである。従つて「北朝鮮」「南朝鮮」と朝鮮民族を今日まで分断してきた遠因は、「明治時代以降の日本の植民地政策」と「大東亜戦争」が遠因ともいえる。

このような朝鮮半島の二分割政治が、やがて「朝鮮戦争」になるわけである。

②米軍基地反対闘争の先駆けー「米軍内灘試射場反対運動」の経過

沖縄の話を聞くたびに胸は痛むが、自分の話が少しでも力になればいいなと思う。

沖縄の悲願無視された怒り

【全国革新懇世話人・鶴彬を顕彰する会顧問 荻昭三さんのレジュメより】

①突然「アメリカ軍試射場」に「内灘砂丘」が接収された理由

1952年、突然、北陸の一漁村が、「アメリカ軍試射場反対運動」で世間を騒がせたことは説明が必要である。

明治時代までは「朝鮮半島」は二分された。しかし日清戦争(1894年)、日露戦争(1904年)等によつて半島全体を日本が植民地「朝鮮」(1910年・明治43年)にした

のである。

1952・9・20	内灘村での反対運動の経過（抜粋）	当時、日本全国に約700か所の米軍基地があり、米兵による婦女暴行、無錢飲食、無謀運転が頻発していた。これ等に対する国民の怒りを、最初に大衆運動として「怒りの拳」を挙げたのが、「米軍内灘試射場反対運動」であった。
		1953・9・21 政府、内灘を試射場にと意向示す

内灘村議会、絶対反対決議
村民大会、絶対反対決議
石川県議会、反対決議
村民、県庁へ千人デモ
内灘婦人会、千人デモ
試射開始
内灘村永久接收反対実行委員会（出島委員長）結成
閣議「永久接收」を決議
着弾地座り込み開始
政府・内灘村、使用期間3年以内とする覚書交換
1年13日間の座り込み中止
内灘試射場、正式返還
約800人の武装警官に

（③）内灘闘争の背景
囲まれながら、自由党吉田内閣や米軍と対峙できた要因→スロー・ガン「金は一年、土地は万年」

明治以来100年間の零細漁民からの脱却を「砂丘の農地化」によつて成し遂げようとしたことが反対闘争の主因ー当时、内灘村の人々は1085世帯の6500人、職業は漁業が918戸、農業はわずか3戸という漁村一地場漁業と鰯、烏賊、鰯、貝柱の出稼ぎ漁業であり、年間世帯当たり収入約10万円で、

生活保護世帯が13%に及ぶ極貧の漁村であった。同時に金沢市を中心とした周辺自治体の「基地反対決議」や県内労働組合、婦人団体の支持、全国的な学生、労働組合組織の「米軍基地反対」という意思が、村民感情との共感をもたらした。

試射再開の日、1953年6月14日の役場付近の光景は忘れられない。
村反対実行委員会は、試射再開時に、村長の着弾地での座り込みへの参加を求めて、全村民が役場に押し掛ける作戦を準備した。6月14日、午前8時2分、42ミリ迫撃砲が試射開始第一弾として発射、同時に村役場前の「火の見の櫓」の「鐘」が乱打された。8キロメートルに及ぶ細長い6つの部落から、瞬く間に続々と役場前に人々が駆けつける。その先頭に立ったのは、頬かむりをし、鎌や鍬を引っ提げた「浜のおかか」たちであった。そろそろ300人の鉄兜と盾と棍棒で武装した警察予備隊員ー東海、阪神から集められた「警察予備隊員」ーも、出島反対実行委員長の一聲、「回れい右！」の指示で後退していくのであつた。
この「米軍基地反対の戦い」は、内灘村民や石川県民の「米軍基地反対」の願いには、直接には叶わなかつたが、その後、浅間、妙義山基地反対同盟との交流、そして「立川米軍基地拡張反対闘争」に連動し、今日の沖縄灘火力発電所建設を阻止したことを、明記すべきであろう。

2017年 新年あけましておめでとうございます

エコマスク

〒929-1215 かほく市高松 乙2-181 TEL 076(281) 3263 FAX 076(281) 3733

再生碎石販売
コンクリート・アスファルト廃材処理
産業廃棄物収集運搬業
一般貨物自動車運送業
一般建設業、解体工事一式

 特定建設業 麟香重機建設

代表取締役社長 麟香 敏信

かほく市白尾 タ 16-11

TEL 076(283) 0363

FAX 076(283) 1898

2017年 新年あけましておめでとうございます

<p>鶴彬を顕彰する会幹事</p> <p>長谷 久人</p> <p>かほく市高松 フ1-2</p>	<p>鶴彬を顕彰する会幹事</p> <p>岩原 茂明</p> <p>金沢市駅西新町3-17-2</p>	<p>鶴彬を顕彰する会幹事</p> <p>寺内 徹乗</p> <p>かほく市高松 ウ16-6</p>
<p>鶴彬を顕彰する会幹事</p> <p>板坂 洋介</p> <p>金沢市城南2-42-9</p>	<p>鶴彬を顕彰する会幹事</p> <p>遠田 勝良</p> <p>かほく市木津 口1-18</p>	<p>鶴彬を顕彰する会幹事</p> <p>山田 裕一</p> <p>かほく市七窪 ハ24-1</p>
<p>鶴彬を顕彰する会幹事</p> <p>平野 道雄</p> <p>かほく市高松 ツ66</p>	<p>鶴彬を顕彰する会幹事</p> <p>喜多 義教</p> <p>かほく市高松 ソ32</p>	<p>鶴彬を顕彰する会幹事</p> <p>竹田 求</p> <p>かほく市内高松 ケ131</p>
<p>鶴彬を顕彰する会幹事</p> <p>笠島 和夫</p> <p>かほく市高松 ケ1-1</p>	<p>鶴彬を顕彰する会幹事</p> <p>細川 律子</p> <p>かほく市高松 ュ60-57</p>	<p>鶴彬を顕彰する会幹事</p> <p>松尾 正寿</p> <p>かほく市高松 ケ131</p>
<p>鶴彬を顕彰する会監査</p> <p>納口 清隆</p> <p>石川県河北郡津幡町加賀爪 ホ70</p>	<p>鶴彬を顕彰する会幹事</p> <p>角島 広治</p> <p>かほく市中沼 ヨ26</p>	<p>鶴彬を顕彰する会幹事</p> <p>平野 喜之</p> <p>かほく市高松 ツ66</p>
		<p>鶴彬を顕彰する会幹事</p> <p>横山 隆信</p> <p>石川県中能登町黒氏 ハ50</p>
		<p>鶴彬を顕彰する会幹事</p> <p>井口 武久</p> <p>かほく市木津 ハ65-7</p>

宇部先生特別授業の感想文 ③

(アイウエオ順)

かほく市立高松小学校6年

●「手と足をもいだ…」こわい戦争

《竹内　あいみ》鶴彬さんの本名と、鶴彬

さんのつくった詩がしれたり、鶴彬さんの本名、喜多一二という名前がわかつたのでよかつた。鶴彬さんが高松にすんでいて、はかが高松じやないところにあって、鶴彬のお兄さんがすんでいるところにはかがあつたといふことがわかつたです。鶴彬がかいりました。鶴彬さんのかいた詩は戦争をあらわしているということがわからました。そのかいた詩が「手と足をもいだ丸太にしてかへし」とは、戦争で手と足をせつだんされて日本にかえされるということがわかつてよかったです。手と足を大陸において来たというところがこわいなあと思いました。鶴彬のお兄さんがそこにすんでいたことがわかつた。祭りで白い服をきた人が回りにたくさんいたということがわかりました。いろいろな場所に詩がされたのでよかったです。

●戦争反対の気持ちよく伝わる

《竹内　康樹》ぼくは、今日の特別授業で、つる彬さんが、とてもすごい人だと分かつたし、つる彬さんが、すごく戦争がきらいだ、または、絶対戦争は反対だという気持ちが、よく伝わってきました。昔の時代は、戦争は反対だという事を伝えたら、警察につ

かまってしまうのに、戦争はいやだということを、詩に書いたので、とても勇気のある人だと思いました。

ぼくは、つる彬さんのような、もし「んな

ことをしたら、こんなことをするぞ」と言わると、そのことをできなくなるので、つる彬さんは、だれもができないことをやつたのです、す「い」と思いました。そして、この「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という詩には、たくさん意味が込められていて、少しわいと/orもあるけど、別の方向から考えてみると、いい詩だと思いました。あと、本当の名前は、喜多一二という名前だと聞いて、初めて知りました。今日の授業は、とてもいい授業になつたし、授業の終わりに、手づくりのつる彬さんの詩がかかれている、ティッシュケースがもらえて、とてもうれしかつたです。す「く勉強になりました。

●身近な公園に作品、びっくり

《竹島　千哉子》今日は、つるあきらさん

のさまざまなせんりゆうをおしえてもらい、今まで知らなかつたつるあきらさんのせんりゆうがくわしくしっかりと分かつたのでよかつたです。それにつるあきらさんがかほく市高松出身で、生まれたこともびっくりしました。そして、つるあきらさんのせんりゆうがこんな身近な「れきし公園」などにあることなども、今までそんなにしらなかつたので、とつてもびっくりしました。そして、つるあきらさんは29才という若さで死去し、そんな若さでせんりゆうのすばらしいさくひんを何こもかいているのです、「い」と思いました。それにつるあきらさんのしんせきも、今

■企画 募集☎285-0638 井口

七塚川柳会

●定例句会・ふれあい館二階会議室
《毎月》第一水曜日午後2時～4時

■企画 募集☎281-1201 小山

高松川柳会

●定例句会・高松産業文化センター
《毎月》第四日曜日午後1時～3時

2017年 新年あけましておめでとうございます

内科・神経内科

かねだ医院

院長：金田 平夫

かほく市高松 ヲ2-6

☎076-281-1164

もなお生きているなんですよいいました。今日の5、6時間目にこのつるあきらさんのべんきょうとしようかいをおしえてもらつてとつてもつるあきらさんがどんな人がくわしくわかりました。それにつるあきらさんの事を紹介して下さった宇部先生、ありがとうございました。

●戦争つてそんなにひどかつたのか

『竹田 愛里』

鶴彬さんは、石川県河北郡高松町に生まれて、川柳作家として、戦争をしていましたときずつと戦争に反対していたという事を初めて知りました。その中でも、戦争に反対する言葉を使つてはいけないとなつた時でも、鶴彬さんは反対していた、という事を聞いてとても勇気があって、戦争に反対する気持ちが強かつたんだなあと思いました。

私だと、戦争に反対する言葉を使つてはいけないとなつた時は、自分のためにも反対する気持ちをなくそう、と考えていたと思いません。「手と足をもいだ丸太にしてかへし」の意味を聞いた時は、戦争はそんなにひどい事だつたのかなあと強く伝わってきました。鶴彬さんみたいに、一人でも(反対したりすることなど)自分の意見は変わらずに、ずっと納得したりするまでやるということなどを見習つていきたいと思いました。

●鶴彬は本当にすごい人だつた

『竹田 衣里』

私は鶴彬さんについての話を聞いて分かったことは、鶴彬さんは、警さつに連れていかれるかも知れないのに戦争反対を言い続けるのはすごいなあ思いました。戦争に反対する川柳を書き続けるのは勇気の

いることだと思うし、五・七・五に言いたいことをまとめるのもすごいことだなあと感じました。すごいことをしていったのに二十九才でなくなるのははやいことだと思いました。ふしきに思つたことは、思つた事を川柳に書いただけなのに何で取り調べを受けないといけなかつたんだろうと思いました。言葉の自由が失われてそれでも戦争に反対したと思ったら本当にすごい人だつたということが分かりました。心に残つた川柳は「手と足をもいだ丸太にしてかへし」です。意味を考えるととてもおそろしい川柳だけど、でも戦争では本当に起つてたと思うと鶴彬さん反対して正解だったんだなあと思いました。最後に思つた事は本当にすごい人だつたんだと思いました。

●近くの公園に石碑、びつくり

『竹中 俊太朗』

ぼくは鶴彬などという川柳作家がこの高松にいたというのは知りませんでした。そしてそれが川柳作家の中でもよりすぐりのうでまえで戦争に反対する正義の心を持っていたということは今回の授業まで知りませんでした。こんな川柳家でも人としてもりつぱな人の石碑がぼくたちがふだん何げなく遊んでいる公園内にもあるということにとてもびっくりしました。鶴彬さんは本名喜多一二という名前で大正六年にお父さんを亡くしてから戦争で周りのひはんもうけながら立派な川柳を書いて二十九才という若さで亡くなりました。ぼくはこの鶴彬さんが書いた川柳の中で一番心に残つた川柳は、「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という川柳です。理由は、手と足をもいだというほど戦争

和川柳社

(社団法人全日本川柳協会加盟)

●会員募集 0223-4466
会則「和川柳社は、鶴彬・岡田一杜らの川柳革新運動の伝統を受け継ぎ、平和な社会を目指す」

夢をあきらめない人の為に

TOSHIKOあしなが基金

ペンライトの会

☎ 076-281-1201

日本共産党かほく支部

かほく遠塚 イ149-1

レオパレス

2017年 新年あけましておめでとうございます

でおつたけがは大きかったと思うしむりやりとつたそなうだからすごく戦争は悲しかったんだなと伝わってきました。ぼくはこの鶴彬が生まれは身近だけど人としてはほどとおいなと思いました。

●命の大切さ、いつまでも心に

『竹中 希々花』私は、今まで鶴彬さんにについて全く知りませんでした。この特別授業で鶴彬さんについて深く知りました。高松にこんなに有名な人がいたことも、戦争に反対し続けたことも、知らなかつたけれど知ることができてよかったです。鶴彬さんの句には、戦争での出来事や、思いがたくさんつまつてしまします。戦争に反対するだけでつかれます。今の時代と昔の時代を比べてみると、どれだけちがつているのやらと思います。鶴彬さんの心の強さを、私も身につけることができればいいなと思いました。川柳をしていた鶴彬さんの句を見て、私がもし…と考えただけで体がぞわぞわします。でも、そのような時代に生まれた方たちの知えなどをすごいなと思います。鶴彬さんを知って損など一つもありません。知つて得ばかりです。知らないかたの人を知る時はすごく興味しんしんでした。高松のい人を知つていらない人には、ぜひ教えてあげたいです。高松の有名な人は、桜井さぶろう左衛門だけかと思うとそうではなかつたのですね。鶴彬さんを知つて高松をたくさん語れるようになりました。そして、特別授業で学んだ、命の大切さはいつも心に残ると思います。

●あ母さんを思うやさしい句

『竹中 右迅』ぼくがまず一番に思つたことは、「昔は大変だつたんだ」ということで、鶴彬さんがいくら努力して「戦争反対」とさけび続けても、認めてもらえたからです。必死にがんばつても認めてもらえないなんて、とても厳しいと思います。だけど、あきらめないで努力し続けた鶴彬さんは、とてもすごいと思つたし、鶴彬さんの戦争に対する気持ちがどれほど強いものなのかを実感できました。

次におどろいたのは、「鶴彬」は、ベンネームで、本名はべつにあるということです。ぼくは、てつきり「鶴彬」が本名だと思っていましたので、本名が「喜多一二」と知つてすぐくおどろきました。

ぼくが一番心に残つた句は、「可憐なる母は私を生みました」です。とても努力熱心な方だと思つていたけど、お母さんを思うやさしい句もかいていて、とてもやさしい方でもあるんだなあと思いました。今回の学習は、とてもいい勉強になりました。わざわざ、ティッシュカバーまでお作りいただき、ありがとうございました。

●未来を考え戦争に反対した鶴彬

『土田 莉緒』私は、鶴彬さんのことは、名前だけ知つていて何をした人か全然知らなかつたけれど、今回の特別授業で鶴彬さんのことが少し、くわしくなつたと思います。鶴彬さんは、戦争の時にろうやに入れられると分かつていても戦争反対!と言いつづけていたのは、未来のことも考えていましたし、戦争では、たくさん的人が戦つて亡くなつてしまつた。

まうので私も、反対すると思います。けれど私は、人に左右されてしまうので心の中で、相手の国も私たちの国も戦つて、勝つてうれしいのかもしれないけれど、それ同時に戦争することで失うものの方が多いから、反対する!と思つても勇気がでないけど戦争をやろうと思つてゐる人がいたら、鶴彬さんのように反対します。けれど鶴彬さんは、戦争のせんりゆうをまとめた言葉にしていて、今でも残つてゐるので、これからも受けつがれていけばいいなと思います。

●召集令状の赤紙、きついな

『土田 拓虎』ぼくは、初めて鶴彬さんに召集令状により兵士として戦地に行かなければならなくて、いかなければ、ろう屋にとじこめられるから、赤紙がでたらきついなと思いました。

そして、鶴彬さんの書いた川柳は、「高梁の実りへ戦車と靴の鉢」「屍のゐないニュース映画で勇ましい」「手と足をもいだ丸太にしてかへし」…まだ3つあるけどこの中に心に残つた川柳は「手と足をもいだ丸太にしてかへし」が心に残つていて思つたことは、昔の戦争は、たいへんなんだなと思いました。

●鶴彬、高松にいてくれてありがとう

『中泉 麻歩』私は、鶴彬さんが、戦争をとめようとした事がよく分かりました。鶴彬ではなく、本名が喜多一二という事も分かりました。

ケガをしたら、手や足をむりやり切る事がこわいと思いました。ちりようもせず、生きるために、手や足を切るのがかわいそうで、今の生活がいいと思いました。

戦争の歌を書くと、けいさつにつかまるのが、辛い事がよく分かりました。でも、鶴彬（喜多一二）は、戦争はダメだというのが、すごいと思いました。

鶴彬句碑マップで、高松歴史公園にあつた事に、びっくりしました。あれも、鶴彬さんが書いたものだと分かりました。一九〇九年、一月一日、石川県河北郡高松町に生まれたのが、よかったです。自分で、鶴彬が、高松町にいてくれて、ありがとうございます。戦争は、絶対にやつたらダメだと思いました。

●いいこと言つているのに検挙なんて

『中川 拓海』鶴彬さんにについての話を聞いて鶴彬さんは、絶対戦争は、反対だと強く言い続けたのかなあとと思いました。理由は、警察につかまると分かつていても、戦争は反対というような川柳を書き続けたからです。また、川柳作家はとても忙しくて、大変だと思いました。鶴彬さんは、とてもかわいそうだとも思いました。理由は、戦争は反対と言つていいことを言つているのに、警察に検挙されたりしたからかわいそだと思いまし。ぼくは、今まで鶴彬さんについては、あまり知らなかつたけど、今日の宇部さんの話を聞いてたくさん分かったのでよかったです。

●西田幾多郎よりすごい人だ
『中田 朱城』ぼくは、今日の鶴彬さんの

特別授業で、喜多一二という本当の名前などが分かつてよかったです。それに、喜多一二さんの関係している人などが分かつてよかつたです。昔に高松にすごい人がいるんだなあと思いました。ぼくは、鶴彬という人がいるということは、しらなかつたけど知れたので、これからがう県に行つて自まんできるような全国に有名な人だからしてみたいと思いました。かほく市には、西田幾多郎さんしかいないと思っていましたけど、西田幾多郎さんよりもすごそうな人がいたという事にびっくりしました。

ぼくは、今日の特別授業ですごく高松のすごい人にきょうみを持ったのでこれから高松のすごい人をしらべて、高松のすごい人について話があつたらすぐになんでも知つていて人になりたいです。

戦争の時代の事について鶴彬さんは、戦争の事を17音にまとめるなどすごいことをしたんだと思いました。しかもいくつもです。

●いいこと言つているのに検挙なんて

『中田 夏綺』私は、鶴彬さんのことを探して、鶴彬さんは、とてもかわいそうだとも思いました。理由は、戦争は反対と言つていいことを言つているのに、警察に検挙されたりしたからかわいそだと思いまし。ぼくは、今まで鶴彬さんについては、あまり知らなかつたけど、今日の宇部さんの話を聞いてたくさん分かったのでよかったです。

●鶴彬の行動で今の日本がある

『中田 夏綺』私は、鶴彬さんのことを探して、鶴彬さんは、とてもかわいそうだとも思いました。理由は、戦争は反対と言つていいことを言つているのに、警察に検挙されたりしたからかわいそだと思いまし。ぼくは、今まで鶴彬さんについては、あまり知らなかつたけど、今日の宇部さんの話を聞いてたくさん分かったのでよかったです。

鶴彬さんは、戦争をしている時にこの川柳を発表しようと決めました。これは戦争に反対しているということです。私は、この行動に関心を持ちました。鶴彬さんのこの行動が、昔に高松にすごい人がいるんだなあと思いました。これから日本も決して戦争はしてはいけないという考え方につながつたんだと考えました。これから日本の日本も決して戦争はしてはいけないと思います。そして、この高松にすばらしい人がいたことをほこりに思います。

●沢山の人々に鶴彬のこと広めたい

『西田 和蕙』六月二十八日に「鶴彬さんの特別授業」を受けました。私は、今日この授業で鶴彬さんの本名、喜多一二さんについて初めて知りました。授業を受ける前は、何の話をするのかなと思つていました。ですが、宇部先生の話を聞いているうちに、とてもいいお話をうながしました。鶴彬さんは、川柳作家で戦争の川柳を書いて戦争に反対している気持ちは分かります。理由は、私も戦争に反対しているからです。戦争をすることで、多くの人の命をうばうことになります。そのように、人の命をうばい合うことは、犯罪よりもっと悪い罪だと思います。戦争をしてから犯罪を起こす人もでているんじやないかなとも思います。私は、鶴彬さんをとてもらそんけいします。彬さんのように自分の意見を一生思いつづける人になりたいと思いません。宇部先生のように私も、鶴彬さんのことを沢山の人々に知つてもらいたいと思います。彬さんによると、宇部先生のように私も、鶴彬さんのことを沢山の人々に知つてもらいたいと思いました。色々な人に伝えて地球にいる人全員に鶴彬さんを知ってもらいたいです。

鶴彬さんが29歳という若さで死んでしまったのにとてもおどろきました。もう一つおど

ろいたことがあります。それは、鶴彬さんが、この石川県出身ということです。同じ石川県出身の人が、とても有名な人だと知りました。鶴彬さんの川柳が全国各地の岩などに書いてあると分かりました。その川柳の中の「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という川柳の意味のもいだが、むりやり取るという意味で、手と足をむりやり取ったということが分かつて、少し怖くなりました。鶴彬さんの略歴を読んで鶴彬さんは、生まれて死ぬまでの二十九年間の一分一秒間を大切にしていたんだと思いました。私もこの一分一秒間をとても大切にして今的人生を楽しみたいと思いました。いこつは、光照寺というお寺の墓にあると分かりました。とてもよいことを知れたので、もつともつと鶴彬さんることを調べていきたいと思いました。

今日の特別授業は、私にとつてとてもよい経験になりました。宇部先生、私も宇部先生のように、沢山の人々に、鶴彬さんことを広めます。下の学年の子や、大人、お母さん、お父さん、おばあちゃん、おじいちゃん、知っている人は、もつとたくさんの人とを知つてもらい知らない人にも教えていきました。今日は特別授業で、宇部先生に、鶴彬さんことを教えてもらつたことにとても感謝しています。本当にありがとうございます。これからも沢山の人たちに鶴彬さんのことをお伝えください。ありがとうございました。

● 戦争の悲惨さ、あらためて学ぶ

《早川 結彩》 私は、鶴彬さんはすごい人だと思いました。理由は、自由なことを言つ

たり書いたり歌つたりすると、すぐ牢屋に連れていかれるという時代だったのに、戦争反対の句をたくさん世の中に出し、自分の考えを広めていったのがすごいと思いました。もし、私だつたら、ろうやに連れていかれるのを防ぐ事はできないのですごく戦争反対の気持ちが強かつたんだなと思いました。高松出身なのに、岩手など遠いところまでいって、いろいろな句をかいたというのもすこいと思いました。鶴彬さんの句を読んで、あらためて、戦争は悲さんな事で、もう絶対にやつてはいけないということを伝え、教えてくれる句だと思います。そして石川啄木といふ人を兄のように思い、戦争はしてはいけないということを人々に伝えるということをしたというのが本当にすごいことだと思いました。でも二十九さいの若さでなくなつたのが本当に残念だつたなと思いました。けれどもたくさんの方を今に残していたので、りっぱな人だと思いました。

● 戦争に反対のなぞがとけた
《藤池 咲笑》 六月二十八日に鶴彬の特別授業がありました。

私は、鶴彬という名前は、知つていたけど、どんな人で何で有名なのか、が知らなかつたので、今日の授業を受けて知らなかつたことが分かったのでよかったです。

鶴彬がペンネームで、喜多一二が本名だと聞いて、何故戦争に反対していたのだろう?と不思議でした。でも、宇部さんの話を聞いて、なぞがとけました。それは、鶴彬の川柳で「手と足をもいだ丸太にしてかへし」というものです。もいだは、むりやりという意味があるそうです。

私は、宇部さんの話で、「戦争は、終わらない」という話を聞いて、たしかに、世界では、戦争をやつている国は、たくさんあるのでは、戦争がはやくなつてほしいなあと思いました。

間に、思いました。鶴彬さんは、石川啄木さんのことを兄のように思つていたということにもびっくりしました。啄木さんの歌も見なで歌えるというぐらい鶴彬さんは石川啄木さんのことをいい人だと思つていたということも分かりました。石川啄木さんは、三千万円の借金を残したまま死んでしまつたのがすごい人だつたんだなと思いました。特別授業をありがとうございました。

書いてある鶴彬さんのせんりゅうは、わかりやすいです。

● 苦しく辛い世を川柳一つで表現
『西谷 心美』私は、「手と足をもいだ丸太にしてかへし」の川柳の意味は、最初は分からなかつたけど、うべいさお先生の話を聞いていくうちに、だんだん分かりました。つる彬さんは自分の周りがいまどんなことになつてゐるか、今どんなじょうきょうかを川柳として五七五にまとめていて、名作がありすごいです。先生がいつたように戦争の時こういうことをいつても書いてもだめなのに川柳として書いていて、すごく勇気がある人だと思いました。

つる彬さんは戦争がどれだけ苦しくて辛くてひどい世の中を川柳一つで表現し、自分が危険なのに、世の中を戦争と言う争いじやなくて、平和という世の中にしよう自分から思い、川柳をつくり続けていて、とてもすごい人とおもいました。私は、家ぞくにこの話をして、どれか一つでもいいので、川柳の石碑をみにいってみたいであります。

● 赤紙だけで人の運命を変える

『野口 萌菜』私は、今日この話を聞いて鶴彬さんはせんりゅうが好きということが分かりました。田中正造さんや石川たく木さんをすごい人と思っていたことも分かりました。鶴彬さんが作った「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という句は、とてもざんこくな意味をもつた句だと知りました。手と足を切るなんて、いまはざんこくすぎて絶対にできることではありません。たとえを使って

書いてある鶴彬さんのせんりゅうは、わかりやすいです。
最後になりましたが、たつた赤紙だけで人の運命を変えることがあるんだと知りました。戦争に行かないと、警察につかまるからこんな時でも川柳を書いていた鶴彬さんはすばらしいです。

そして今日は、ありがとうございました。赤紙をもつてきたのは初めてだときいたので、今日は本物の赤紙をありがとうございました。こう演説もありがとうございました。

● 日本を平和にしようと川柳作つた

『能田 蒼太』鶴彬さんの話を聞いて、川柳は一つだけで小説一冊分の話があるということがすごいと思いました。「萬歳とあげて行つた手を大陸において来た」という川柳で戦争に行く前、萬歳をした腕が切られて帰ってきたということが戦争はすごくざんこくでこわいんだなと思いました。「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という川柳で、戦争に行つてうでをますいもせずに切られるということが戦争は、すごくこわいんだなと思いました。鶴彬さんは、石川啄木さんをそんかいして川柳を始めたといふことが分かりました。鶴彬さんのお墓は、光照寺にあると分かりました。「胎内の動き知るころ骨がつき」という川柳で、おくさんが赤ちゃんをうもうとしていたときに戦争に行つていた結こんじました。鶴彬さんが作った「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という句は、とてもざんこくな意味をもつた句だと知りました。手と足を切るなんて、いまはざんこくすぎて絶対にできることではありません。たとえを使って

● 鶴彬がもし勇気を出さなかつたら…
『長谷川 幸』私は、鶴彬さんが戦争の時に自分が殺されるかもしれないのにもかかわらず、川柳を発表した勇気がすごいと思いました。もし、鶴彬さんが勇気を出してくれていなかつたら、日本はもつともつとひどいことになつていたかも知れないと考えると、本当にすごいと、思います。

私が一番心に残った川柳は

「胎内の動き知るころ骨がつき」

という川柳です。わけは、お父さんの顔をみれなかつた子どもがかわいそだだからです。それと、子どもの顔をみれなかつたお父さん、子どもは生まれるけど、自分のだんなさんが亡くなつてしまつたお母さん、みんなかわいそだと思ったからです。私だつたら、姉妹も二人いるし、お母さんも、お父さんもみんないるからよかつたと思えました。今日は、鶴彬さんの話を聞かせてくれたり最初にゲームをさせてくれたりしてくれて、ありがとうございました。楽しかつたです。

● 自分の国の人もあどされていた

『福井 輝龍』ぼくは今日うべ先生から鶴彬さんの話を聞いて鶴彬さんはすごく勇気のある、りつぱな人だと思いました。
わけは、戦争で、たいへんに戦争をわるいいい方をすればすぐにろうやへいれられるのに鶴彬は、いっぱい人のいかりを川柳であらわしていたのでぼくだとぜつたにできないしこの時代にいた人たちだつていたかつたけど言えなかつたということをきいて、ぼくは、戦争はてきをたおすだけのものかと思つていたけど同じ国の人たちもあどされたりし

ていたとわかつてあらためて戦争は、ひどくひさんなことだと思いました。だからこそ今ぜつたい戦争はしたらダメだということがあらためてつたわつてきました。ぼくは、鶴彬さんは、一つだけではなく、いくつも捕まると知つていて書いていて、えらい人にじゆうをつきつけられてまでいうことをきいていた人たちがかわいそうだと思いました。

●

せんそうはほんとうにこわいものだ

《布施 翼汎》今日は鶴彬さんの話を、いわてからきたうべ先生が話しにきてくれました。

鶴彬さんは、せんりゅうをかく人でたくさんせんりゅうをかいていました。あるせんりゅうを、つくりました。「手と足をもいだ丸太にしてかしてかへし」というせんりゅうをつくりました。鶴彬さんはこのせんりゅうをつくつたとき、手と足をもいだのばしよは、うたれてたまがあたつてそのままにしておくとくさるから、むりやりでもてやあしをとるといういみがこめられている。丸太にしてかへしとは、せんそうにいって手や足がなくなり、せんそくからかえつてきたら、すでにちりようすることができるないじょうたいになつてていること。それで、鶴彬さんは、それがいいやだった。赤紙がとどくといやでもいかなくちゃだめ、いかないとしんせきとか、いえのかぞくがるやにぶちこまれることがわかつた。せんそくはほんとうにこわいものだとしりました。

● 心に残る「高粱の實り…」「手と足を…」
《松田 康平》ぼくは、鶴彬さんの話を聞

いて、鶴彬さんが、すごい人だと思いました。ぼくが、心に残った、川柳は、二つあります。一つ目は、「高粱の實りへ戦車と靴の鉢」です。わけは、せつかく、もうすぐ、しゅうかくできそだつたのに、戦車などで、畑があらされるのが、農みんの人が、かわいそだからです。しかも、家も、燃やされたりして、すごいショックだろうなあと思いました。もう明日にもしゅうかく直前だつたから、もつとひどいと思いました。

二つ目は、「手と足をもいだ丸太にしてかへし」です。わけは、無理やり、戦争へ、つれていかされ、いかなかつたら、ろうやへ連れられて、どつとも、いやだからです。それで、戦争に行つても、もし、じゆうの弾が、当たつたりしたらそのうでや足をむりやりとされるので、もどつても、仕事が、できなくて、かわいそだからです。それを言つたらダメなのに、それを、みんなに出す鶴彬さんの勇気がすごいと思いました。

●

今度は私たちが未来を変えていく

《松本 夢花》私は、一番印象に残つているところとは赤紙だけで、戦争に行くということです。わけは、行きたくない人もいるの

に無理やり行かされていました。「胎内の動き知るころ骨がつき」という川りゅうで、もしも私がつまだつたらもちろん泣くしそこから一人で、この赤ちゃんを育てないといけないし一人家族が減ついてもつと悲しくなるからです。

戦争に行きたくない人でも行かないといけないというのは、とても勇気がいると思うので戦争に行つた人は、すごいなと思います。戦争は、こわいともとから知つてたけどこのお話を聞いてますますこわくなりました。

これからは、私の命を大切にしようと思つたしつるあきらさんみたいにいい川りゅうを作りたいと思いました。今度は、自分たちが未来を変えていけたらなと思いました。また戦争がないように、平和にくらしていきたいです。そのために、平和な日本にして気持ちよくすごしたいです。

は、「手と足をもいだ丸太にしてかへし」戦争で、足と手をうしなつた、かなしい話を聞きました。そこで私は、心が痛みました。戦争は、自分でじや止められないと、自分だけじや止められないから、多くやしかつただらうと思います。戦争におじやんは出てないけど、じいちゃんのおとうさんが行って私のおじいちゃんは、「戦争なんていらない」と毎日のように言つていました。

●戦争に行かないと警さつにつかまるなんて

『室田 勇陽』今日、鶴彬さんについて話

を聞きました。鶴彬さんは、有名な川柳の人で川柳をしている人で知らない人はいないと言ふことが分かつてすごいと思いました。最

初、「手と足をもいだ丸太にしてかへし」の意味がぜんぜん分からなかつたけど話を聞くと意味が分かつて少しこわいなと思いました。戦争は、すごくこわいもので何百万人も

が亡くなつていてかわいそうだなと思いまし

た。赤紙をもらつた人は必ずいかないといけ

ないということをぼくは知つていたけど行か

ないと警さつが来てつれて行かれてろうやに

とじこめられるということは知らなかつたの

でびっくりしました。ひどい時には家族や親

せきまでつれていかれて最悪だなと思いまし

た。鶴彬さんは、一番、好きだつた人は石川

啄木さんという人で鶴彬さんは二十九さいの

若さで亡くなつてすごくかわいそうです。今

日、宇部功先生に話をしてもらつて鶴彬さん

のことが良くわかりました。すごく良い人だ

と分かりました。

●「手と足を…」のせんりゆうにかんどう

『森 虎ノ介』つるあきらさんの手と足を

もいだ丸太にしてかえしというところがかんどうしました。

今日は、いそがしいなかきていただきまこ

とにあります。でもきちんとあります。

ほくのじいちやんも、あかふだがきたので

せんそうへいくことになりました。でもきち

のたいちようで、しじをだすだけだつたの

で、せんそうからかえつてきました。さいごにもらつた、ティッシュケースがと

てもきれいにいりました。
またあうきかいがありましたらよろしくお
ねがいいたします。

●一番気に入つた「可憐なる母は…」

『谷内 くるみ』私は、つる彬さんのせん

りゆうの中では、ばんざいとあげて行つた手

を大陸においてきたと手と足をもいだ丸太に

してかへしと、胎内の動き知るころ骨がつき

が怖い（グロテスク）と、思いました。でも

それだけ怖いから戦争の怖さもよく分かりま

した。つる彬さんもそうだけどみんな若くし

て亡くなつてているから、それだけきびしい時

代だつたのも、わかります。一番つる彬さん

の気に入つた、せんりゆうは、可憐なる母は

私を生みましたで、自分を生んだことに感謝

しているのかなと予想できます。自学ノート

でつる彬さんの他のせんりゆうでも気に入つ

たのがないかなと調べてみます。改めて話を

聞いて、本当に戦争はこわいとわかりました。

今もかんこくや中国、イスラムきょうなども

どの戦争が起こりそうな国（団たい）なども

平和になるなどと思います。

●鶴彬のせんりゆうはあくが深い

『山崎 湊』今日は鶴彬さんの話を聞かせ

ていただいてありがとうございます。

ぼくは、鶴彬さんの話を聞いて、その中で

とくにびっくりしたのは、「胎内の動き知る

ころ骨がつき」でした。わけは、戦争中にお

なかの中に赤ちゃんが生まれておいわいをし

ようとしていた。でも、その人のお父さんの

い骨がとどいてきた。おなかから生まれてと

中までお父さんが生きてるとうそをついてき

たけれど、中学校くらいのときに本当のこと

を知らされてかわいそうだつたからです。

他にもいろんな話を聞いて、本当に戦争は

こわいと思いました。今までこわいとたくさん思つたことがあつたけど、あらためてわ

かりました。戦争は一生終わらないと聞いた

とき何でと不思議に思いました。でも家族に

めいわくをかけるとか何で自分が死ななかつたのかなとか苦しい思いが残るというこ

とが分かりました。鶴彬さんがかいらせん

しみが、とてもつたわつてくるから。

鶴彬さんは、二男として生まれたわりに、兄妹からすごくたよりにされていました。

昭和十三年にしんでしまつたけれど、すごくばかりやで、勉強もまじめにやる人。しかし、がん

ここにいい宝物は、川柳だとわかりました。

だから、私も鶴彬さんのように、川柳をたくさんかいてみて、彬さんのように、自分の宝

物をのこしたいです。

私は、鶴彬さんみたいに、なりたいなあと

思いました。

● 戦争への思い大きく変わった

『米田 龍輝』今日、鶴彬さんの話をうべ先生から聞いた。

鶴彬さんの話を聞いて、僕が一番心に残つてるのは、川柳だ。なぜなら、改めて、戦争がダメなことが分かつたから。これからは、もう戦争がおこらないようにしたい。もし戦争が始まつても、死者ができる前にやめさせたいと思う。

赤紙一枚で、運命を変えることになるからその紙を見たときは、すごいと思つたけど、今は、こわいと思う。

今日は、鶴彬さんの話を聞く前は、「戦争なんて、たいしたことない」「別にいつてもいい」とかを思つていたけれど、鶴彬さんの話を聞いた後は、こわくて、「戦争にいきたくない」「戦争は、こわいものなんだな」「自分が出なかつたら、回りにもめいわくなるのか」など話一つで、思ったことが、大きく変化することも分かつた。戦争がない時代に生まれてよかったです。

(七塚小学校は終了)

人なんだなと思いました。

他にも、戦争は勝つても負けても良いことはないということや、日本は中国やかん国などの国人々を殺したり、畑をつぶしたりして、中国やかん国では日本をうらんでいる人がいることも分かりました。さらにおどろいたのがつるあきらさんのお墓が岩手県の盛岡市にあつたことです。岩手県や石川啄木と、とても関係が深いといふことがびっくりしました。あきらさんの川柳はとてもすてきだと思います。この川柳のように戦争の恐しさを伝えて平和が続けばいいと思います。

● むごすぎる戦争、よく分かつた

『5年 岩崎 野乃花』私は、今日の川柳教室で、鶴彬さんの「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という川柳を読んで、戦争で戦つた人のことを書いて、さらに戦争はしてはいけないことをうつたえ続けたというようにはじめました。そして、その川柳を出してしまつてつかまつてしまつてもいいという、勇気を持つていてすごいなと思いました。また、なくなつてしまつた後のほねが、大阪や、石川県でもなくして、この岩手県にあつたことによてもおどろきました。しかも、二十九才でなくなつてしまつて、戦争の時代は、二十代から三十代くらいでなくなつた人がとても多かつたんだなと思いました。

● 喜びと悲しみが入った「胎内の動き」

『5年 遠藤 芙姫』川柳の話を聞いて、一番初めに出てきた、「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という川柳は、五・七・五の十七音の中に戦争のつらさや、悲しみが入つていて、すごいと思いました。鶴彬は、戦争をテーマにした川柳をたくさん作つていて、どれも、思ひが一気にわつとくるような感じでした。その中で、特に私がすごいと思った川柳は、「胎内の動き知るころ骨がつき」という川柳です。読んだだけではあまり分からなかつたけれど、先生に教えてもらい、はつきりと分かりました。おなかの中の赤ちゃんが動いているというのが分かるころに、戦争へ行つた人の骨が箱に入れられて返されると知つてびっくりしました。この川柳には、喜びも悲しみも二つの気持ちが入つていて、びっくりしたし、鶴彬の関係や、川柳のことがたくさん知れたので、私も川柳を作る時は深く考えてみたいです。

● 川柳で戦争をやめようとした鶴彬

『5年 三上 夢叶』今日、宇部先生に川柳のことについて教えてもらつて、鶴彬のことにについて知りました。

二十九才でなくなつてしまつて、すごくわかかつたのにかわいそうだなと思いました。鶴彬は石川啄木のことをそんかいしていく川柳人になつたことにびっくりしました。戦争の川柳を書いてある本を出したら特高のけいさつにつかまることが分かつていて、この本を出さないと、何も変わらないと思つて出したのがすごく勇気がいると思うし、それだけ、戦争をやめさせたいんだということ

盛岡市立生出小学校5、6年生

● 戦争の恐ろしさを川柳で伝えて

『5年 岩崎 志保』今日、つるあきらさんについての話を聞いて、石川啄木のことをとてもそんかいしていることが分かりました。戦争に反対することを書けばたいはされるのを分かつていてるのに川柳を雑誌にのせて置いてすごいと思いました。とても勇気がある

が分かりました。このことを聞いて、戦争をやめようとがんばっていることがすごいと思うし、もう一度と戦争はしていけないということを改めて思いました。本当に川柳で戦争をやめようとしたことがすごいと思いました。川柳が少しむずかしかつたけれど、昔のことを知ることができてよかったです。

●言論の自由ない時代にすごい勇気

『6年 号刀一郎』今日の川柳教室で、ぼくは学んだことが二つあります。一つ目は、戦争の川柳を鶴彬が書いていたことです。昭和時代、言論の自由がなかったのに、鶴彬が戦争についての川柳を考え、みんなに広めようとした、しかし、言論の自由がないから、出したらつかまるけど、出したのが、すごく勇気があると思いました。二つ目は、鶴彬と石川啄木についてです。鶴彬は、小さいころから石川啄木の短歌に興味があり、ほとんど暗記をしました。鶴彬は、石川啄木の短歌を知らなかつたら、戦争についての川柳を書けなかつたと思いました。

今回の学習で、改めて戦争は、人々を傷つけるんだと思いました。でも、鶴彬は自分の戦争の思いを川柳にして、分かりやすかつたです。今日の学習をこれから川柳に生かして、佳作以上に入れるようにがんばります。

●世界中の人人が「戦争はいけない」と
『6年 佐々木 果蓮』私は、今回の川柳教室でお話を聞いてみて、鶴彬は、警察に留置されてまで、戦争についての自分の意見を言いたいと思つたのが、すごいと思いまし。また、石川県出身の鶴彬が岩手県で、遺

骨が見つかって、お兄さんが盛岡まで持つてきたのがすごいぐう然で、そんなすごい人の遺骨が岩手県にあるのがすごいと思いました。鶴彬は、石川啄木が好きでほとんどの短歌を覚えて、啄木が鶴彬が川柳人になるきっかけになつていて、直接は関わっていないのに、なぜ、啄木を知つて、好きになつたのかなど思いました。私は、世界中でかく兵器のない国を増やして、小さい戦争、大きい戦争関係なく、戦争は戦つた人達同士が被害者になるので、戦争をしてはいけないという考えが世界中の人が持てるようになればいいと思いました。鶴彬や戦争中のことなどについて教えて頂きありがとうございました。

●「啄木を尊敬した鶴彬」心に残る

『6年 菅原あづさ』私は、鶴彬について話を聞いて、鶴彬が玉山出身の石川啄木のことを尊敬していたことが心に残りました。そして、最初にやつた「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という川柳が、「ちいちゃんのかげおくり」や「一つの花」など戦争に関わることには、石川県で、無理やりひっぱる川柳だということが分かりました。もいだ丸太にしてかへし」という川柳が、「ちいちゃんのかげおくり」や「一つの花」など戦争に関わることになると聞いてびっくりしました。わけは、私は、りんごをひっぱるという意味で川柳にしたのかなあと思つたからです。そして、鶴彬は、石川啄木のことを「お兄ちゃんのような人」と思つていたことが分かりました。鶴彬は、警察につかまると分かつて川柳にしたのかなあと思つたからです。それから、田中正造が岩手に来ていたことや石川啄木と少しでも田中正造が関係していることが分かりました。鶴彬の遺骨が、出身地の石川県ではなく岩手県のお墓にあることが分かりました。戦争に関する鶴彬の川柳を聞いて、鶴彬は戦争をしてはいけないということを伝えたかったのだなと思いました。今回学んだ鶴彬のことや石川啄木や田中正造のこと

2017年賀正

毎月第3土曜 午後オーブン

はまなす文庫

かほく市高松 ユ 60 - 5 細川律子宅

☎ 076-282-5640

り入れたいです。

●警察につかまると分かつていても：

『6年 菅原凜』私は、鶴彬の話などを聞いて、鶴彬が書いた川柳で手と足をもいだ丸太にしてかへし」という川柳が、「ちいちゃんのかげおくり」や「一つの花」など戦争に関わることになると聞いてびっくりしました。わけは、私は、りんごをひっぱるという意味で川柳にしたのかなあと思つたからです。そして、鶴彬は、石川啄木のことを「お兄ちゃんのような人」と思つていたことが分かりました。鶴彬は、警察につかまると分かつて川柳にしたのかなあと思つたからです。それから、田中正造が岩手に来ていたことや石川啄木と少しでも田中正造が関係していることが分かりました。鶴彬の遺骨が、出身地の石川県ではなく岩手県のお墓にあることが分かりました。戦争に関する鶴彬の川柳を聞いて、鶴彬は戦争をしてはいけないということを伝えたかったのだなと思いました。私は、誰かが言った意見を全て信じるのではなく、自分で、実際に行って見たり、ちがう人の意見をしゃべったのかなあと思つた。私は、誰かが聞いてみたりしていきたいです。鶴彬の話を教えていただきありがとうございました。

●日本人をうらむ中国人、かん国人
『6年 竹田美奈』今日の川柳教室で、

新しく分かった事は二つあります。一つ目は、「高梁の實りへ戦車と靴の鉢」という川柳の意味についてです。日本軍が、中国の一部やかん国を占領している時に、日本軍が、農家の人が育てた高梁を戦車や靴でつぶしたり、罪のない人達を殺して家をたくさん燃やしたりして、今でも中国人やかん国人は日本人をうらんでいる事です。二つ目は、鶴彬さんが尊敬している石川啄木は、田中正造とつながりがあったことです。石川啄木が号外を売つてそのお金を全てぼ金していく、石川啄木は、自分でかせいだお金を一円も自分で使わずに、田中正造にぼ金していく、「えらいなあ」と思いました。

もしも、これから戦争が起こりそうになつたら、小さい戦争、大きな戦争で人がたくさん亡くなる事に変わりないので、戦争に反対していきたいし、戦争が無くなるように何か自分でも出来る事をしたいです。

●啄木を目指してがんばった鶴彬

『6年

畠山

和佳菜

私は、今日の川柳

教室で分かった事がたくさんあります。その分かった事は「手と足をもいだ丸太にしてかへし」という川柳の意味は、戦争で手や足をもいで丸太のようにして返すという事と、鶴

彬の本名は喜多一二で、石川県河北郡高松町で一月一日に生まれたという事です。また、鶴彬のお墓が石川県河北郡高松町ではなく、岩手県の盛岡市についた事と、鶴彬は、石川啄木を目ざしてがんばっていた事と、鶴彬は刑務所のろうやで死んでしまったという事です。あと、鶴彬のお墓が岩手県の盛岡市にあるわけは、鶴彬のお兄さんが岩手県に住んで

いたからだということも分かりました。私も、石川啄木や鶴彬のように川柳が上手になりました。私が一番心の中に残った川柳は、「胎内の動き知るころ骨がつき」という川柳です。わけは、良い事があつたり、かわいそうな事があるからです。

連載・創作物語

鶴彬つ子たち

岩原 茂明

第一話

昨日の夕方のことだつた。高松は砂丘地帯なので、服も足元も砂まみれだ。砂でかすんでいる先に誰か男の人のような姿が見える。なんとなく軍服を着た兵隊さんのような感じがした。

海人はびっくりして、浜のほうに向かつて全速力で自転車をこいだ。兵隊さんはまぼろしのように消えていた。

そこには祖父の家がある。玄関にあつたぞうきんで足をぬぐい、海人は乗つてきた自転車を片づけ、家の前にいた祖父に訊ねた。

「ねえ、じいちゃん。日本がおかしな国になつたの?」

祖父は商売物の竹籠の砂ぼこりをはたいていた。海人の声で額をあげて、ふしぎそうな顔をした。

「なんだ、久しぶりにやつてきたと思った

いたからだということも分かりました。私も、石川啄木や鶴彬のように川柳が上手になりました。私が一番心の中に残った川柳は、「胎内の動き知るころ骨がつき」という川柳です。わけは、良い事があつたり、かわいそうな事があるからです。

「女性週刊誌に載つてゐるんだつて」
海人の口はいつのまにかとんがつていて。「ううん、ママがそういつてる。『日本はおかしな国になつてきた。今に兵隊さんばかりいた』って」
「ほほう」「ほほう」

「女性週刊誌に載つてゐるんだつて」
海人の口はいつのまにかとんがつていて。「ううん、ママがそういつてる。『日本はおかしな国になつてきた。今に兵隊さんばかりいた』って」
「ほほう」「ほほう」

「へえ！」

「戦争に反対した人もいたんだ。知つてゐるだろうか、高松の生まれで鶴彬という川柳作家とか」

「うん、聞いたような・・・」

「鶴彬は本名を喜多一二(かつじ)といつてのう」

お祖父ちゃんは、海人の頭に手をやつた。
海人は、その間にまずお祖父ちゃんの話を落ち着いて聞いてみようと考へだした。

「えつ、一二なら次男なの。俺とおんなじ?」

「ううん、祖父は、両手を海人の手に重ね合わせた。

「ううん、きっと十二月に生まれたからそんな名前をつけたのだな。両親がいなくなつてから、親戚のおじさんに引き取られてな」

祖父は、坂の下のほうを指さした。

「鶴彬の家は浜辺のすぐ近く、この家から歩いて三分の歴史街道沿いでな」

広い砂浜が見渡す限り続いているところだ。

祖父は目を細めた。

「十七歳のときの句で『触れもせで別れし恋を忍ぶ春』・・・』というのがあるなあ」「触れもせで別れ・・・なんだか古めかしいなあ。俺、四年の時別れた、りつちゃんとは

別れのキスしたよ

祖父は笑った。

「あはは、海人ならそうだろうね。これは鶴彬のおさななじみの女の子が両親がいなくて戚で、互いに似た境遇でひかれていったんだね」

「いつも、海人と呼び捨てにされていたが親しみがあった。同じかなあ」

「同じ部活をすると仲よくなるということと同じかなあ」

海人は放送部に入っている。自分からとうより、四年生になつてどこに入るかと考えていたら同級生の高川里香に誘われたのだった。そのりつちゃんはお父さんの仕事の都合で金沢に転校してしまつた。

「まあ、それとは違うけど、いや似てるか

も、そして、十九歳の頃になると、東京に出でいった。世の中がひどい不景気になつて、仕事のない人がたくさん出て、だんだん日本

が戦争に向かつていつたころだ」「へえ、詳しく知りたい！」

「すぐ近くのまちかど交流館の三階に鶴彬資料室があるから、今度見たらいい」「わかった、いつてみる」

帰り道、自転車を押して登つていたら、同じ学年の未歩と透が並んで通りを歩いていた。そういうえば、九月はじめの今頃はママたちが透の家のぶどう園でお手伝いをしている。三人でのぞいてみたら、声がかかつた。「あら、海人、こっち来て」山原ぶどう園に入つてみた。「ルビーロマンよ。これは小さくて売り物にならない。だからみんなで分けて食べるの

よ」といつて三粒くれた。

透が自慢の野球の話を始めた。今ジャイアントとタイガースが闘つているが、戦争前から激しく競り合つていて、沢村賞の沢村栄治投手が活躍したこともあったそうだ。

次日曜日に「鶴彬資料室」にいつてみた。

このあたりは、歴史街道というとおり、ふるいたたずまいの家々が並んでいる。ビルの一階はまちかど交流館という喫茶店だ。そこで「鶴彬のことを知りたいんだけど」といつた。

すると、喫茶店のおばさんがいつた。

「三階にいくと、大山さんという男の人と城戸さんという女の人があられるから」

奥に進んでドアを開け階段をとことこと歩いた。

壁には「鶴彬」と記された写真や絵ハガキがところ狭しとはつてある。

三階につくと、入り口が開いていて、「鶴彬資料室」と記された板看板が立てかけてあつた。

鶴彬は大きな顔写真の若い男の人で、顔はやや細長く、耳がずいぶん大きい。まるで大黒様みたいな聴き耳だ。引き締

まつた口元も大きい。香取慎吾みたいにげんこつが口に入りそうだ。

資料室の奥のほうで男の人が数人テーブルの椅子に腰かけて談笑していた。

その間にはなぜかミシンがあつて、女人がイスに座つていた。

海人は誰にということなく訊ねた。

「ここにちは、資料室みたいんだけど」「おう、君名前は？ 勉強に来たんか」

大きな目をした銀髪でスーツを着た大山さんらしい人が答えてくれた。

「黒川海人といいます」

「おう、そうか。まず自由に見てくれ」

城戸さんが「今ぬうたんやけど」といつて、ティッシュを入れには川柳がぬい取られている。

ここは、教室より一回り広い感じの部屋だ。写真や年表や古い書物があちこちに並んで、ティッシュを入れには川柳がぬい取られている。壁には大きなボードが並んでいて、川柳の句がところ狭しと書いてある。

ショーケースや本棚にはぎつしり川柳の本やパンフレットがならんでいる。

鶴彬の足跡を記した展示パネルもずらつと壁にかけてある。

そこに記されているのは

「ロボットを殖やし全部を馘首する」

こんな句だ。

「軍神の像の真下の失業者」

海人は「えっ」と思つてしまつた。「触れもせで別れし忍ぶ恋」というのは、なんとかわかる。

じいちゃんには強がりをいつたが、キスだつて簡単にはできないのだ。

しかし、「ロボットを殖やし全部をクビにする」というのは、なんともすさまじい。

いや、そう思えばりつちゃんのおうちだつて、そななんだ。

お父さんが働いていた電子工業がロボットの導入で人が余つてきた。だから、金沢に引つ越して慣れない営業の仕事についている。(でも軍神ってなんだろう)思わずつぶやいた。

そのとき、階段のほうからがやがやという声がきこえた。

(りつちやんだ!) 懐かしいりつちやんの声だつた。海人は三階のテラスに飛び出して、

大声を上げた。
「りつちやん!」

「海人?」

上がつてきたりつちやんを見て、海人は顔が真つ赤になつた。

資料室に入つて、りつちやんにいかにもやぼつたいと思ひながら「軍神つてわかるか」と訊ねた。

「軍神?」といつてから、「海人は相変わらずだね、戦の神様ならアテナイよ」と答えた。

アテナイかあ。でも鶴彬知つてたのかなあ

「なんでそんなこと聞くの?」

りつちやんは、じつと海人の目を見つめた。

「ほら、こここの『軍神の下の失業者』つて」といつてパネルに案内した。

海人は照れながら「へえ、そんな句があるんだ!」といつたきりじつと見ていた。

すると壁のパネルが目にとまつた。

海人が読んだ。

「中国での戦争中に爆弾を抱えて三人で敵に突撃したんだ」

りつちやんが続けて読んで

「ああ、東京の青松寺というところで、亡くなつた人三人を軍の神様として銅像を作つてあがめていたのね」

海人は氣おくれしながら大山さんに訊ねた。「えつテロリストを崇めていたの。はあ!」

(テロリストと軍神と同じか?) 思い起こして、もう一度訊ねた。

「はあ、わかつた。その崇める銅像の真下に失業者がいたんだね。でもどうしてテロリストなの?」

「当時の日本はそんなおかしな国になつていただんじよ」

「おかしな国!」 海人はびっくりしてしまつた。

「戦争でもうける人もいたが、それは一部で仕事がなくなつた人も多い。鶴彬はそのころ、東京で暮らしていたのだけど、自分も失業者で、生活に困つていることがよくわかつたんだね」

「鶴彬つて失業者だったんですか」とりつちやん。

「あつ、ここに書いてある」と海人があらましを読み上げた。

「しばらくして、金沢に戻り兵隊になつていれる。その間は自由に書き残すことができない

ので、わからない。この時代は男は満二十歳から二年間みんな兵隊になつて、戦争にいつた」

「へえ、じやあ鶴彬も戦争に出たの?」

「いや、実は鶴彬は反戦運動をした罪で大阪の軍隊のろうやに入れられ昭和八年一二月に刑期が終わつてやつと高松にかえってきたんだ」

「東京にはいかなかつたの?」

ここからは、大山さんが答えてくれた。

「仕事がなかつたんだ。ろうやから出た後も警察官が後ろについて回る状況でとても働く

ことができる。それでも帰つてすぐ川柳を

再開している

「警察官つてあのおまわりさん? 交番の」

海人は通学のときにもいつもこやかにあいさつしてくれる交番のおまわりさんを思い出した。

「特別高等警察、略して特高といった」大山

さんが説明してくれた。特高に戦時中は、國の方針に逆らう人はみなつかまつて、牢屋に入られていた。

「どうして、おまわりさんが・・・最後のほうは声が消えかかった。」

大山さんが、椅子に腰かけるように勧めてくれた。

「いや、それがおかしな時代だからだ。鶴彬の川柳が國の方針と違うといって・・・」大山さんは力説した。城戸さんが茶碗にお茶をそいでくれた。

「どんな句を読んでいたの?」

少し興味が湧いてきた。大山さんのほうを向いて聞いた。

「だから『ロボットをふやし全員クビにする』とかだ。そういうのを詠むのも國の方針に逆らつていると、とられていたんだ」

「どうしてよ。そんなことは当たり前のことをやらないの」

海人は大山さんの顔を見た。大山さんはうなずきながら答えた。

『欲しがりません勝つまでは』とかいつて、戦争に勝つことが目的で国民の幸せは後回し

という、おかしな時代だつたんだ

「ふーん、おかしな時代! ママとおんなじこというんだね」

海人はりつちやんの顔を見てから考えてみた。それが幼いときからのくせだつた。

「そうか、ママもそういったか」
大山さんは、海人の目をじっと見つめた。
その時、ママたちが未歩や透と一緒に資料室に上がってきた。

鶴彬のほうは、こんな句を発表したのでまた特高につかまって、二度目のろうや入りの末にそのまま病氣で死んだとのことだ。海人は泣きたい気持ちになつた。

「大山さん、もう止めて！」
ママたちが声を涸らした。

海人はほつとした。

「こんど命日のお祭りがあるから、そのときにもママと一緒にゆっくりご覧なさい」と城戸さんによわれた。

(続く)

1月28日に顕彰会総会

鶴彬を顕彰する会では、来る1月28日(土)午後1時30分から、かほく市たかまつまちかど交流館1階ホールで第18回総会を開きます。

2016年度の活動報告、会計報告のあと、今年度の計画として次のような事業が提案される予定です。

- ・9月14日に第19回鶴彬をたたえる集い「碑前祭」

- ・8月に第6回「高松歴史街道フェスティバル」および万燈会

- ・第5回かほく市民川柳祭(作品応募は6月15日～7月15日)

- ・市文化活動支援事業として次の3件を予定。また、石川県地域文化活性化事業・かほく川柳講座

・絵本「鶴彬物語」制作

鶴彬を後世に伝えねば

—資料館、3句碑を見学して—

愛知県在住 浜田 光生

去る11月10日、マイカーで能登旅行をした愛知県在住の浜田さんらの一行4人がその帰途、かほく市高松にある鶴彬の3つの句碑や、資料館の見学に立ち寄つて下さいました。あまり時間がなく、十分なガイドはできませんでしたが、数日後、次のような感想を送ってくださいました。

(前略) 実際に鶴彬の生地を訪ねますと、彼の純真さ、やさしさ、心の痛みが手に取るよう理解できました。暗い時代だったからこのような秀れた反戦川柳が詠まれたと思いますが、平和ボケしている私達は実際にこういったことがあったことを忘れがちです。改めて平和の有難さを知ると同時に、後世に伝えていかねばならないと痛感致しました。

それについても鶴彬を顕彰する会の皆様が一時的なイベントにせず、息長く続けていくこととされるに心から敬服致します。同時に、会員募集をしておられるとのことで、年会費と「鶴彬通信 はばたき」購読料(3年分)を送付いたしますので手続き願いま

・シンポジューム「鶴彬を語る」なお、総会のあと「懇親の集い」を予定しています。参加自由です(会費千円)。顕彰会活性化のために大勢の参加をお待ちしています。

会員募集 年会費: 2,000円 (団体3,000円) 「鶴彬通信 はばたき」 購読料1,000円/年

郵便振替口座 00740-5-75480
加入者名 鶴彬を顕彰する会

■発行 鶴彬を顕彰する会

■事務局 〒929-1215 石川県かほく市高松 キ5 (小山 広助 気付)

■TEL・FAX 076-281-1201

■E-mail turuakira@yahoo.co.jp

■ホームページ <http://tsuruakira.jp>